



序章

第1章

第2章

第3章

第4章

第5章

第6章

第7章

第2章 斑鳩町の維持・向上すべき歴史的風致

第1節 斑鳩町の維持・向上すべき歴史的風致

歴史的風致とは、「地域におけるその固有の歴史及び伝統を反映した人々の活動とその活動が行われる歴史上価値の高い建造物及びその周辺の市街地とが一体となって形成してきた良好な市街地の環境」（歴史まちづくり法第1条）とされている。

第1章で述べたように、1400年を超える歴史をもつ斑鳩町には、法隆寺をはじめとする歴史的建造物や歴史的な町並みが残るとともに、そこには固有の歴史及び伝統を反映した人々の活動が現在に引き継がれている。このような歴史的風致は大きく二つに分類することができる。

一つ目は、「受け継がれてきた仏教信仰」に関連する歴史的風致で、特に法隆寺を舞台に、仏教行事を地域の人々が支え、これに参加することで引き継がれている活動である。

二つ目は、「暮らしに息づく歴史と文化」に関連する歴史的風致で、神社や集落の町並みを舞台に、五穀豊穡の祈りなど秋祭りに代表される伝統的祭り、集落の暮らしの安全や健康を祈る講・座などの民間信仰として引き継がれてきた活動である。

このような斑鳩町の歴史的風致は、以下のように整理される。

1 受け継がれてきた仏教信仰に関連する歴史的風致

2 暮らしに息づく歴史と文化に関連する歴史的風致

- ア 斑鳩神社の秋祭りにみる歴史的風致
- イ 西里の愛宕講など民間信仰にみる歴史的風致
- ウ 龍田神社の秋祭りにみる歴史的風致
- エ 吉田寺の「きちでん放生ほうじょうえ会」にみる歴史的風致

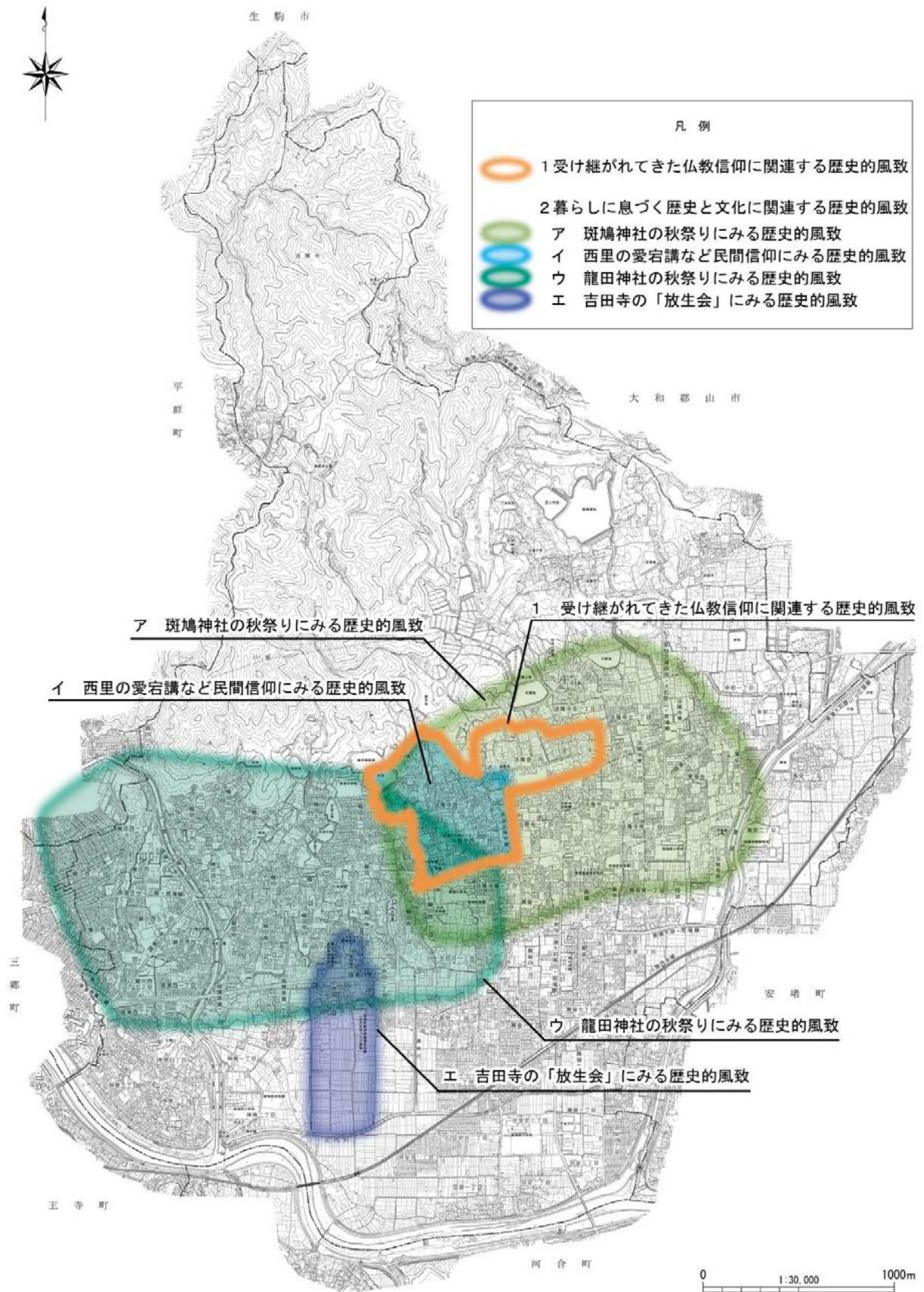


図2-1 斑鳩町の歴史的風致の分布

第2節 維持・向上すべき歴史的風致の内容

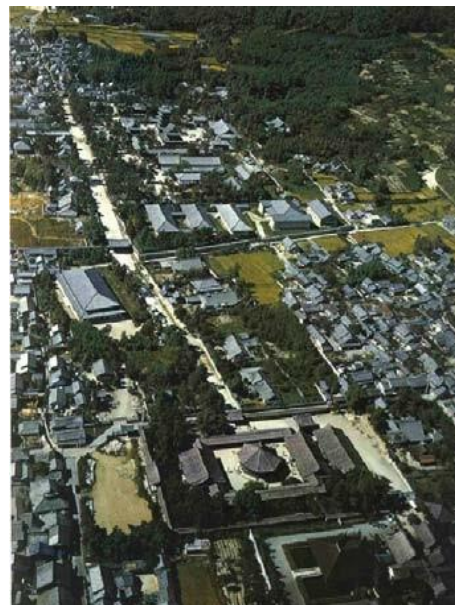
1 受け継がれてきた仏教信仰に関連する歴史的風致

法隆寺では、数々の伝統行事が引き継がれてきている。

法隆寺は、奈良時代には官寺に準じて朝廷の保護を受け、多くの国家行事が行われた。『続日本紀』（延暦16年（797）成立）によると、称徳天皇により天平神護3年（767）に全国の国分寺に吉祥悔過（国家の安泰・万民豊楽を祈願する法会）を命じる勅が発せられ、法隆寺でも神護景雲2年（768）には講堂で吉祥悔過（修正会）が始められた。また、奈良時代は入唐僧や渡来僧たちによって三論、唯識、律などの新しい学問が続々ともたらされた時期であり、法隆寺の寺僧たちもその研鑽に努め、学問寺として、太子の時代から続けられてきた夏安居を「功德安居」と称して行うようになった。

平安京へ遷都した後は、平城京の官寺は徐々に衰えを見せ始めるが、法隆寺は次第に太子信仰の根本寺院としての性格を強め、貞観元年（859）に僧道詮によって夢殿の修理が奏上され、聖徳太子の遺徳を讃えて行う法会である「聖霊会」も復興する。さらに、保安2年（1121）には、東室の南面を改装し、聖徳太子を祀る聖霊院が造られ、翌3年（1122）には聖徳太子500年忌が行われた。

鎌倉時代には、南都の興福寺の支配下におかれ、法相宗の行事である慈恩会や三蔵会なども行われるが、太子信仰が新たな鎌倉仏教の影響を受け発展していった。聖徳太子が観音の化身であるという伝承が浄土宗と融合し、弘法大師が聖徳太子の後身であるとして真言密教とも結びついた。現在も行われている舍利講はこれを背景に成立した行事である。



法隆寺伽藍全体俯瞰

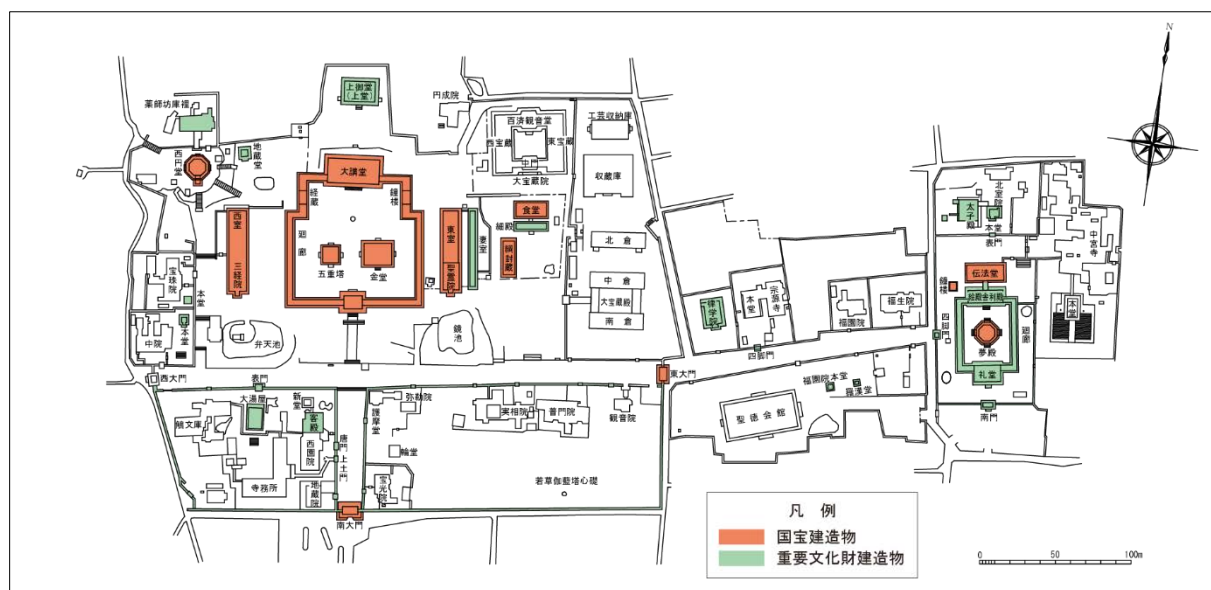
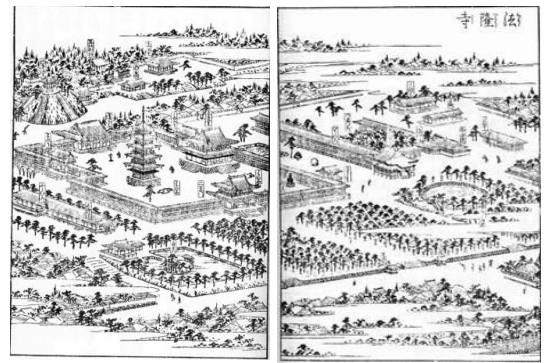


図2-2 法隆寺境内図

江戸時代には、大工や左官、石工などの技術者が太子講をつくり、毎年参詣をする傾向なども生まれ、聖霊会などにも多くの参詣者が集まる大和の名所であった。

明治維新の廃仏毀釈などにより、法隆寺の年中行事はほとんど中断するが、法相教学の研鑽道場として、明治26年(1893)に法隆寺勸学院が設立され復興の道を歩むことになる。明治36年(1903)には、^{さんぎょういん}夏安居が三経院において復興、大正10年(1921)

には聖徳太子1300年御忌法要が営まれ、聖霊会を旧姿に再興している。昭和25年(1950)には、法相宗から独立し、聖徳宗を開宗し、翌26年(1951)に太子教学を広めるために法隆寺夏季大学を開校している。



法隆寺『大和名所図会』寛政3年(1791)

(1) 歴史的風致を形成する建造物

① 法隆寺西円堂

法隆寺西円堂(国宝)(以下、「西円堂」という。)は、法隆寺境内の北方の小高い場所に建つ、1重、本瓦葺の八角円堂である。組物は3斗、中備は間斗束で、手先を出さないで軒の出が少ない。又、4面に扉を吊るが、連子窓は正面左右だけに開け、ほかは土壁としている。西円堂は橘夫人の発願により行基が創建したと伝えられるが、『法隆寺別当記』(東京国立博物館蔵『1996法隆寺献納宝物』No.8、南北朝一室町時代成立)によれば創建時の建物は永承5年(1050)に倒壊したとされ、現堂は建長元年(1249)に再建された建物である。昭和10年(1935)の大修理時の発掘調査で、現堂と大きさの似た堂で、凝灰岩の基壇、礎石、土壇の須弥壇等、奈良時代の遺構が発見されたことから、西円堂は奈良時代に創建されたことが確認された。本尊の乾漆薬師如来坐像(国宝)は、脱活乾漆造、漆箔、像高246.3cmの大きな仏像である。



西円堂



乾漆薬師如来坐像

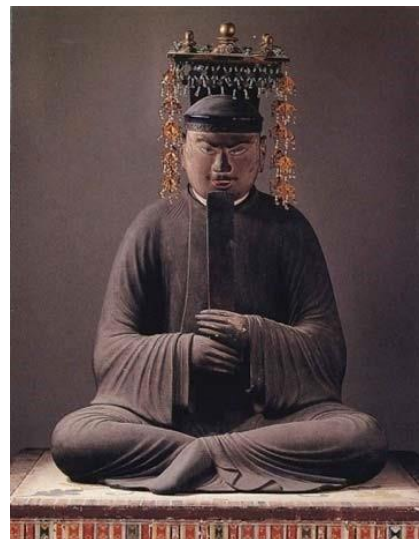
② 法隆寺聖霊院

法隆寺聖霊院（国宝）（以下、「聖霊院」という。）は、金堂・塔を取り囲む廻廊の東にある南北に細長い建物で、東室の南側に位置し、桁行6間、梁間5間、切妻造、本瓦葺正面1間通り檜皮葺で、聖徳太子をまつる堂である。聖霊院と東室はひと続きの棟で、保安2年(1121)に東室の南部を改造して聖霊院とした。その後、鎌倉時代の弘安7年(1284)に建て替えたのが現在の建物で、このとき、棟を高くして東室とは別棟のようにしたが、『法隆寺別当記』には弘安7年(1284)聖霊院新造と記されている。

本尊は木造聖徳太子坐像（国宝。なお「木造聖徳太子 山背王 殖栗王 卒木呂王 恵慈法師 坐像（聖霊院安置）」として指定を受けている。）で、檜材、寄木造、彩色、像高84.2cm、聖霊院の中央厨子に安置されている。体内には蓬萊山に乗った奈良時代の金銅救世観音像や平安時代に隆^{りゅう}暹^{せん}が書写した三経が納められている。



聖霊院



木造聖徳太子坐像

③ 法隆寺西室

西室は西院伽藍の西にある南北に細長い建物の一画に該当し、南側に三経院、北側に西室が位置する。建物は、桁行19間、梁間正面5間（三経院を含む）背面4間、切妻造妻入、本瓦葺、「法隆寺三経院及び西室」として併せて国宝に指定されている。南側7間が三経院であり、その北側に接続する12間の僧房が西室に該当する。『法隆寺別当記』によれば、創建時の建物は、承暦年間(1077～81)に焼失し、寛喜3年(1231)に再建されたとされる。



西室



図2-3 歴史的風致を形成する建造物の位置

序章

第1章

第2章

第3章

第4章

第5章

第6章

第7章

コラム：法輪寺妙見堂の星祭り

法輪寺は法隆寺の北方の山裾にあり、その北西に三井集落が位置する。法輪寺の三重塔は、明治期には国宝に指定されていたが、昭和19年(1944)に落雷により焼失した。井上慶覺・康世師の住職2代にわたる再建の発願・勧進、地元及び作家幸田文氏始め全国の人々の支援により、西里の宮大工西岡常一棟梁のもと、三重塔は、昭和50年(1975)に創建当初の様式にて再建された。

その法輪寺妙見堂では、毎年節分の日(2月3日)に「星祭り」が行われる。妙見堂は講堂の後方にある。かつては、当寺の西北の妙見山に建っていたが、享保16年(1731)に現地に移築したものである。法輪寺の山号を妙見山とするのも当時の信仰によるものである。妙見堂は桁行3間、梁行3間の入母屋造、瓦葺、内陣天井に星曼荼羅を描き、表に「日本最初北辰妙見尊星王」の額を掲げている。近年老朽化が著しく平成15年(2003)に改築落慶法要が行われた。講堂に安置されている本尊は、妙見菩薩立像、木造彩色、像高41cm、11世紀頃の作とされている。

妙見菩薩は星のめぐりの中心である北極星(北辰)が仏格化された仏像で、妙見菩薩を本尊とする妙見信仰は6世紀頃に日本にもたらされ、平安時代初期には北極星を祭って現世利益を得ようとする信仰が盛んであったようで、貴族の間でも法会が盛んに行われたと伝えられる。後の中世では武士の軍神として、近世には商家や町人に諸願成就の仏として信仰を集めるようになったといわれている。

法輪寺妙見堂の星祭りは、諸星の高位である北辰(妙見菩薩立像)を祀る妙見堂に参籠して護摩を焚き、五穀豊穡、天下太平、一族繁栄、病気平癒、息災延命、商売繁盛など1年間の願い事を祈願する法会で「星供」ともいわれ、光賛宝祐によって旧妙見堂が再建された享保16年(1731)頃から現在まで続いており、授与される護符は、昭和40年代まで寛政10年(1798)の版木が使用されていた。



法輪寺遠景



妙見菩薩立像



妙見堂

(2) 歴史的風致を形成する活動

① 西円堂の鬼追式（追儼会）

西円堂の鬼追式は「追儼会」ともいい、毎年2月3日に行われる修二会の法楽として行われる儀式である。修二会とは、2月に行われる法会のこと、法隆寺では西円堂で行われることから「西円堂修二会」と呼ばれるようになった。毎年2月1日から3日までの3日間、本尊の薬師如来坐像の前で、薬師悔過（国家安泰・寺門興隆を祈願する法会）の行法が行われる。『寺要日記』（東京国立博物館蔵『1996法隆寺献納宝物』No.333、宝徳元年(1449)成立）に拠れば、この法会は弘長元年(1261)に勅会として始まったものであり、鬼追式も同年から始められたと伝えられる。西円堂は民間信仰が盛んな堂で、江戸時代の『古今一陽集』（良訓・信秀著、延享3年(1746)成立）などでも、法会の賑わいが記されている。

かつて、鬼追式は堂内で行われていたが、いつしか堂外の壇上に移って行われるようになった。西円堂の基壇上で黒鬼、青鬼、赤鬼がそれぞれ所作を行い、松明を投げ、その後には毘沙門天が現れて鬼を追い払う。人々は、西円堂の「薬師さま」に祈りを捧げ、鬼たちが持つ松明の火の粉を浴び、無病息災を願う儀式である。

初めは、法隆寺の僧が鬼役を勤めていたが、寛政9年(1797)以後、丑寅（北東・鬼門）の方向にあたる法起寺北方の岡本集落の人々が三鬼と毘沙門天を勤めている。

岡本集落の鬼になって出る家は18軒で毎年交替する。1週間前に、法隆寺からこの村へ頼みにいくと役に出る4人が決まる。この4人は、その後は一切穢れたことはせず、精進を続ける。岡本集落からはこの4人が出仕するだけで、ほかの準備や進行は、すべて末申（南西・裏鬼門）の西里集落の人々が行うことになっている。その世話をする人を「沙汰衆」とも「算主」ともいう。夕方この行事を始める前、出仕者は「鬼の御馳走」を食べる。酢を少し入れた雑煮と昆布、豆腐とで、これを膳の上に並べて出す。ほんの少量で形式化したものになっている。



総社に参拝する寺僧



法会の始めに行われる牛玉降



鬼追式の三鬼と毘沙門天の装束



鬼の御馳走

一番太鼓が鳴ると、準備に取りかかり5度目が鳴る頃に装束を着け始める。この装束も使用する面も伝来のものである。かつて使われていた追儼面三面は重要文化財であったが、昭和47年(1972)からは復刻面を使用している。毘沙門面は江戸時代の面である。追儼面三面の黒鬼は父、赤鬼は母、青鬼は子で、この3匹の鬼が順次西円堂の廻りの壇に出て、後に出てくる毘沙門天に追い払われるのがこの鬼追式の形式である。まず鐘や太鼓を鳴らす所作を7回半行くと、鬼が控え室（薬師坊）から西円堂に向かう。このとき、松明だけの明かりの中、村の子供が鬼の手を引いて西円堂の経壇上に昇らせる。

黒鬼はまず東正面に出て、手に持った大きなマサカリを上方で3回、振り廻す。それがすむと南正面へ行って同じことを行い、更に西正面でも同様のことを行い、都合3回繰り返す。そして、沙汰衆が渡す松明を群衆に投げつける。この松明は長さ4尺位、太さは手で握れる位のものである。父の黒鬼が終わると、次に母の赤鬼が大きな剣を持って出てきて、黒鬼同様に堂を回りつつ、東、南、西の三正面で、剣でしぐさを行い、松明を投げる。次の子の青鬼は、太い棒をもって出てきて、3回棒を大きく振り回す。この間、沙汰衆が渡す松明を群衆に投げつけるのは前と同じである。昔は火の粉を被ると災難に遭わないといわれ、松明が舞い上がるごとに、歓声が上がり盛り上がる。最後に毘沙門天が鉾ほこを持って出てきて、鬼を退散させる意を含んで東、南、西の正面で鉾を左、右、中と3度突く形をする。

最後に三鬼と毘沙門天は、咒師じゅしから牛王宝印ごおうのほういん（厄除け護符）を額にいただき、薬師坊に戻る。その後西円堂に出仕した寺僧たちや参拝者にも牛王宝印の授与があり儀式は終わる。

西円堂修二会が終わると、本尊に供えられていたたくさんの餅を運び出し、これを焼いて寺僧や、行事に参加する人々に配られる。

この西円堂の鬼追式は午後の7時頃から始まり、およそ30～40分で終わる簡単なものだが、大和の数多い社寺の追儼の内でも最も特色があり、いろいろな点でも古義を残しているといわれている。

西円堂の鬼追式は、古くからの法隆寺の伝統的仏教行事であるとともに、「峯の薬師」といわれてきた民衆の薬師信仰が加わり、地域の人々にとっては無事息災・厄除け・健康長寿を祈る行事でもあった。



追儼面三面
(左から母鬼・父鬼・小鬼)



壇上の鬼の所作



壇上の毘沙門天の所作



牛王宝印

まだ寒さが残る節分の日夕暮れ、僧が列をなして階段を登って西円堂に向かう。ろうそくの灯火で薄暗い堂内では入堂した僧侶の読経が響き、修二会が厳粛に執り行われる。人々は日頃は観光客もあまり訪れない静かな西円堂の基壇周りを取り囲んで、厳粛な法要の読経を聞きながらそれぞれ祈りをささげ、静かに法要の終わりを待つ。



丘に建つ西円堂

鬼追式の始まりを告げる太鼓と鐘が鳴る頃には、すっかり夜の帳が降りて、あたり一面は真っ暗な闇の世界となっている。太鼓と鐘の乱声が鳴り止むと、西円堂の北の薬師坊の扉が開かれ、暗闇の中から黒鬼、赤鬼、青鬼、毘沙門天の順に西円堂の基壇上に現れ、朱塗りの柱が八角形のお堂の東正面、南正面、西正面の3面で、お堂を取り巻く群衆に向かって立ち、各鬼が手に持つ大きな松明は恐ろしい鬼の形相を際立たせる。練り歩いた鬼たちは松明をカ一杯に振り回して、群衆に向って投げ入れる。その瞬間、火の粉が天に舞い上がり、湧き上がる群衆の歓声があたりに響きわたると、ようやく斑鳩の里は春の幕開けを迎える。

コラム：岡本集落の法起寺

寛政9年(1797)以後、鬼追式の三鬼と毘沙門天を務めている岡本集落は、法隆寺の北東の山裾にある。この地は、古くは法隆寺村の垣内^{かいと}で、法隆寺の寺領であったとされ、法起寺は、岡本集落の南に位置する。法起寺の三重塔は、塔は3間3重の本瓦葺で、1層の石壇の上に建ち、日本最古とみられる三重塔で、法隆寺五重塔と似た飛鳥時代の様式を今に伝えている。



法起寺遠景

法起寺の創建は、『法起寺三重塔露盤銘』(慶雲3年(706)成立)の銘文によれば、聖徳太子が逝去するとき山背大兄王に遺言し、岡本宮を寺にするように命じたもので、舒明天皇10年(638)に弥勒像・金堂をつくり、天武天皇14年(685)に堂塔を建て、慶雲3年(706)に完成したとされている。岡本宮は、『日本書紀』(養老4年(720)成立)によれば、聖徳太子が推古天皇14年(606)に法華経を講じた処とされる。岡本集落の名も岡本宮^{かみや}に由来すると考えられている。法起寺の南門から上宮へ通じる一本道があり、太子が上宮から岡本宮へ学問に黒駒で通った道と伝わる。



岡本集落の町並み

② 聖霊院のお会式（聖徳太子御忌法要）

聖霊院で行われるお会式（小会式）は、聖徳太子の命日に毎年行われる御忌法要である。

聖徳太子は、推古天皇30年(622)2月22日飽波葦^{あくなみあしがきの} 宮^{みや}（『日本書記』（養老4年(720)成立）では推古天皇29年(621)に斑鳩宮にて死去したとある）で亡くなったと伝えられている。そして、その命日に聖徳太子の御忌法要としてお会式が聖霊院で行われてきた。お会式は、明治43年(1910)までは2月22日に行われていたが、翌年からは新暦で3月22日から24日までの3日間行われるようになった。



お会式

お会式は、聖霊会から発展したものとされている。聖霊会は夢殿で行われていた聖徳太子の遺徳を讃える法会で、夢殿が建立された後の天平20年(748)頃に始まったと考えられている。聖霊会が記録に出てくるのは、『法隆寺別当記』によると11世紀後半からで、延久元年(1069)には絵伝が描かれ、太子の童子形像も造顕されるなど、延久3年(1071)の450年忌を控えた太子信仰の高まりのあった時代である。聖徳太子像が造顕され、聖霊院が建立されたのは太子の500回忌にあたる保安2年(1121)である。

室町時代の終わり頃に、夢殿の聖霊会とは別に、聖霊院でも毎年御忌であるお会式が行われるようになった。さらに太子信仰の隆盛により大勢の参拝客が集まるようになり、元禄4年(1691)に、夢殿で行われてきた聖霊会は大講堂に会場を移して行われるようになった。そして現在は10年に一度大講堂で行われる聖霊会を「大会式」と呼び、毎年行われる聖霊院のお会式を「小会式」とも呼んでいる。

令和3年(2021)には、聖徳太子の1400年遠忌を迎え、新型コロナウイルス感染症対策をしながらも、盛大に聖霊会が行われた。

お会式の法要は、まず3月21日の夕刻から聖霊院にてお逮夜法要が行われる。逮夜とは葬儀あるいは月忌、年忌の祥月命日前夜をさし、22日からのお会式に先がけて行われる法要がお逮夜法要である。お逮夜法要では寺僧たちが唱和する唄、散華の^{ばいさんげしやうみやう} 声^{なんとかくそ} 明^{げもん} に合わせて南都楽所が演奏し、導師は聖徳太子講式を奉読する。続いて解脱上人^{げだつしやうにん} 貞慶^{じやうけい}の作と伝える9首からなる太子和讃が唱和される。



お逮夜法要

3月22日午後1時に聖霊院では、お逮夜法要と同様、唄、散華の声明にあわせて南都楽所が雅楽を奏でる。続いて導師は聖徳太子讃嘆式を朗読し、寺僧たちが訓伽陀を唱える。伽陀とは仏の徳を讃嘆する偈文に節をつけて唱和する声明であるが、お会式では、その一節には『梁塵秘抄』（後白河法皇撰、平安時代末期成立）の極楽歌にある「極楽浄土ノ東門ハ難波ノ海二ゾムカエタル転法輪所ノ西門ニ念仏スルヒトマイレトテ」という文句が採り入れられ、太子信仰が西方願生の浄土信仰と強く結ばれていたことを示しているといわれる。また、太子の徳を

讃える仏教歌である太子和讃も、平素は「略節」と称し簡単な節まわしで唱えるが、お会式では「本節」と称する節まわしで唱え、この法会は堂内の荘厳さといい声明といい、法隆寺独特のものであるといわれている。そして法要は23日と24日に催される。

お会式における聖徳太子御前の供物は、堂内の華やかな荘厳さとあいまって、まるで極楽世界を演出しているかのようである。それは約1か月前の2月の末頃から古い記録に則って準備され、すべての寺僧や法隆寺に働く人たち、あるいは奉仕者による手作りで行われる。

これらの供物は中世以来、綿々と伝えられてきたもので、その源流は朝鮮半島にあるといわれ、当時の食生活の貴重な資料ともなっている。その供物の内容は十三杯御膳、五杯御膳、仏飯と重ね餅、山飾りなどで構成されるが、なかでも、山飾り・大立山は豪華な飾りである。

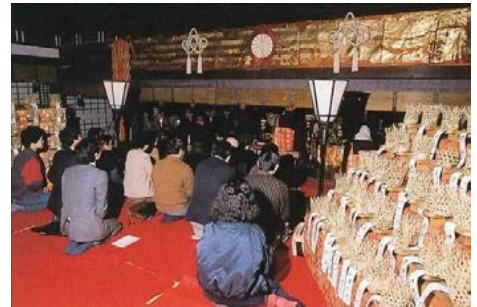
また、お会式の期間において聖霊院の御膳棚に飾られる^{なまごぜん}生御膳は、各地の太子講あるいは個人が寄進した浄財により整えられる。

太子信仰の元となる建物として日頃は静かな佇まいをみせる聖霊院は、聖徳太子の命日の法要であるお会式では、前面の檜皮葺の前庇と向拝の両側には、白、赤、黄、緑、紫の五色の横幕が張られ、その両側には幡が立てられ、華やかさが漂う。また、聖霊院内陣の唐破風が設けられた厨子の前面中央では、壇上に供えられた供物とあでやかな大山立は、まるで極楽浄土を再現したようである。

聖徳太子の命日前日の夕刻より執り行われる幽玄なお逮夜の法要とは対照的に、聖徳太子の命日の午後には、聖霊院内部には多くの参拝する人々が集い、はなやかな南都楽所の楽奏と僧侶の声明が響く中、聖徳太子を讃える法要が営まれ、人々は一体となって亡き太子を^{しの}偲ぶ。

その一方で、境内にはいろいろな露店や屋台が立ち並び、いつもの厳粛な境内とは一変した華やかさと賑わいに包まれる。お会式は、古くから斑鳩のまちをあげて参加したハレの日の楽しみの一つでもあり、境内の露店や屋台を目指す客や楽しそうな子供たちの声であたりの通りは活気に満ちている。

今も昔も変わらず、お会式は、春を待ち焦がれていた人々であふれて、斑鳩の里は本格的な春を迎える。



階段状の御膳棚に飾られる生御膳



昭和37年(1962)頃の聖霊院の露店



お会式での聖霊院

コラム：雅楽と南都楽所

聖徳太子は、「三宝（仏・法・僧）を供養するには諸蕃楽を用いよ」と語ったと伝えられ、仏教の興隆と雅楽は深い関係がある。古式を伝える南都楽所は、春日大社に付属する雅楽団体であり、法隆寺のお会式や聖霊会、特別法要などに出仕している。法隆寺には、平安時代からの舞楽面や現存最古の舞楽装束などが残っている。また、舞楽法会に使用する舞楽面は、法隆寺に51面あり、うち35面が重要文化財である。



南都楽所の雅楽



舞楽法要

コラム：お会式の供物

聖霊院内陣の供物は、すべて寺僧や法隆寺で働く人々、奉仕者の手で作られる。中央花形壇の上段には、お仏飯と重ね餅、中段には小判餅やケイピンという食品をあわせて五種の五杯御膳をおき、下段には色とりどりの十三種の十三杯御膳、花形壇の左右には一対の「ヤマ」を飾る。高さは天井近くに至り、四方八方に弧状の割竹を広げており、周囲を圧する勢いがある。ヤマは、大きな藁の芯を三方に立て、松、杉、橘の葉などを付け、団子で拵えた梅、水仙、鳥（鳳凰）、燕や柿揚、輪餅、ミカンなどで飾ったもので、これは須弥山をかたどったものといわれている。ヤマを立てることから
おおよまだて
 「大山立」ともいわれている。



お会式の供物

コラム：太子道と太子信仰

法隆寺から聖徳太子が通ったと伝えられる二本の道（太子道）がある。一つは、聖徳太子が推古天皇9年(601)に斑鳩宮を造営し、49歳で亡くなる推古天皇30年(622)までの20年間、調子麿を伴に甲斐の駿馬・黒駒に乗り飛鳥の宮に通われた「筋違道」と呼ばれる道である。『太子伝玉林抄』（訓海著、文安5年(1448)成立）によれば、「太子斑鳩宮より、すじかひを経て曾武の橋を渡り、八木の里を過ぎて、橘宮に通ひ給ひし」とあり、蘇武橋、矢就街道、屏風、安堵には太子通行に因む地名伝承が残っている。この道は条里制の地割が良好に残る条理を斜めに走る直線道路であり、現在でも田原本町から安堵町にかけて断続的にはあるが道を辿ることができる。この道筋に残る聖徳太子のゆかりの遺跡とともに残る斜行道は太子道と呼ばれ、人々に親しまれている。

二つは、聖徳太子が亡くなり、河内磯長の御廟（叡福寺）への葬送の道で磯長道と呼ばれてきた道である。この道は、法隆寺より龍田神社、吉田寺、当麻道を経て、西南へ王寺付近から二上山の北麓を越えて河内の磯長の上ノ太子を結ぶもので今も小道で残っている。また、この道は太子生前中、朝鮮半島や中国大陆との間を仏教文化が往来した道でもあった。

太子道は、太子信仰の高まりとともに人々に語り継がれ、今なお所々に太子道と呼ばれる道として残っている。法隆寺では、昭和56年(1981)に聖徳太子1360年御忌記念事業として「太子葬送の道をたずねる集い」を催し、法隆寺から聖徳太子磯長御廟へ参拝をした。その後平成9年(1997)2月22日に「太子道をたずねる集い」（磯長道）を、同年11月22日に「太子道をたずねる集い」（筋違道）を開催し、以後令和元年(2019)まで毎年「太子道をたずねる集い」として、2月22日には磯長道（法隆寺から叡福寺）を、11月22日には筋違道（法隆寺から橘寺）を歩く集いを開催し、毎年多くの参加者を集めていた。



太子道のルート



太子道をたずねる集い

③ 西室の夏安居と法隆寺夏季大学

法隆寺には連綿と続く年中行事がある。仏教の基本儀式である釈迦の誕生や成道、涅槃^{ねはん}といった日に仏教の隆盛を祈念する儀式（仏生会、涅槃会など）とともに、寺の宗派の開祖をまつる祖師に関する三蔵会や慈恩会などの儀式、寺僧たちが学問を研鑽するための法会等がある。

そして、寺僧たちの法隆学問寺を象徴する行事が西室^{にしむろ}で毎年行われる夏安居であり、人々に開かれた行事が法隆寺夏季大学である。

法隆寺は「法隆学問寺」とも呼ばれて、教育学的仏教といわれた教育理想をあらわす根本道場であり、その象徴が夏安居である。夏安居は、インドで毎年雨期にあたる4月から7月の約100日間、布施行や托鉢ができないために、一か所に定住して学問修行に励んでいたことに由来する。その風習が日本に伝わり、天武天皇14年(685)からは鎮護国家の行事として、十五大寺において毎年4月16日から7月15日までの90日間、仁王般若経、最勝王経の講義をしていた。また、法隆寺の夏安居は、聖徳太子の遺命により行われたとする伝承がある。夏安居は、明治の神仏分離令で一時中断するが、明治36年(1903)に三経院で再興され、昭和8年(1933)からは僧房である西室において5月16日から8月15日までの90日間、聖徳太子の記された三経義疏^{さんぎょうぎしよ}（法華経義疏^{しょうまんぎょう}・勝鬘経義疏^{ゆいまぎょう}・維摩経義疏）の講義を行っている。

さらに、夏安居の期間のうち7月26日から29日の4日間、一般の人に開校されるのが法隆寺夏季大学である。昭和25年(1950)に聖徳宗を開宗した法隆寺では、翌26年(1951)から太子教学を広めるため始まったものである。当代一流の学者や研究者を招いて仏教や仏教史、仏教美術・建築・考古学など、法隆寺と聖徳太子に関連したテーマを中心に、4日間にわたって講義が行われ、昭和37年(1962)の開催時には『法隆寺夏季大学記念論文集』が刊行されている。また、西院伽藍のドレンチャー放水見学、若草伽藍跡の見学など、普段は見られない特別拝観なども行われる。当初は西室で行っていたが、昭和36年(1961)に完成した聖徳会館に会場を移して、毎年約600人の受講者がある。

夏安居の期間中の90日間、毎日連続で法隆寺の僧侶により聖徳太子の説かれた三経義疏の講



西室



昭和14年(1939)頃の夏安居



聖徳会館



法隆寺夏季大学



義が行われる西室は、僧侶や信者といった仏教関係者だけでなく一般の人々に聖徳太子の教えを説き、その教えを広めてきた道場である。梅雨の時期をはさんで行われるこの学びの場は、法隆寺の僧侶がもともと僧房として生活の場であった。人々は、時代を超えても、この西室の建物内の座敷に座って、太子の思い描いた仏教世界のお話に耳を傾け、よりよい世界の実現を伝える。

この太子の教えを学ぶ法隆学問寺としての使命を今日に伝えている法隆寺夏季大学は、広く多くの人々に開かれた聖徳太子の学びの場として開催されている。暑い日差しが照りつける中、陽炎のゆれたつ壮麗な法隆寺境内の一角に建てられた聖徳会館において、聖徳太子や法隆寺の歴史や思想等について学ぶ。瓦の並ぶ大きな屋根が特徴な聖徳会館内の広い会場を埋め尽くす参加者たちは、しばしセミの大合唱を忘れ、筆記するペンやページをめくる静かな音だけがする静寂の中、遠く古に想いを馳せる。そして、^{きしやう}徽章（法隆寺夏季大学と印字されたりボン）をつけた参加者たちが境内内外をそぞろ歩く姿は夏の恒例となっている。



図2-4 歴史的風致を形成する人々の活動の範囲

このように、法隆寺では、飛鳥時代以来1400年以上に亘って伝統行事が連綿と受け継がれてきた。なかでも、春を呼ぶ西円堂の鬼追式にみる歴史的風致や、聖徳太子を偲ぶ聖霊院のお会式にみる歴史的風致、太子教学を広める西室の夏安居と法隆寺夏季大学にみる歴史的風致は、法隆寺を舞台にした仏教行事であるとともに、地域の人々が密接に関わり、そして支えた法隆寺に伝わる伝統行事であり、斑鳩の四季の風物詩でもある。

[illegible]

図2-5 受け継がれてきた仏教信仰に関連する歴史的風致の範囲

コラム：金堂修正会

金堂（国宝）は、桁行5間、梁間4間、二重下層裳腰付、入母屋造、本瓦葺、裳階板葺で法隆寺の中心殿堂である。飛鳥時代の創建で、現存する木造建築物では最古の金堂である。

金堂修正会は、金堂で吉祥天立像と毘沙門天立像を本尊として毎年正月に行う法会で「吉祥悔過」ともいう。修正会は、聖武天皇により国家安隠、万民豊楽の祈願を目的として、神護景雲2年(768)に宮中大極殿で行われたのが始まりとされている。法隆寺においても同年から大講堂で行われた。当時の本尊の吉祥天や毘沙門天は画像であったが、承暦2年(1078)には木彫で造顕され、翌承暦3年(1079)にこの二天像は金堂の釈迦三尊坐像の左右に安置され、この年から修正会が金堂で行われるようになり、現在まで続けられてきた重要な伝統行事である。

金堂修正会は毎年の正月8日の後夜（午前1時頃）から14日の半夜（午前0時）までの七日七夜にわたり、晨朝、日中、日没、初夜、半夜、後夜に行われ「六時の行法」とも呼ばれる。吉祥御願日に先立つ正月7日には、聖徳太子をまつる聖霊院で参籠の儀があり、通夜の作法がある。8日夜半すぎから後夜の鐘を合図に、一同聖霊院から金堂陣内に入り、吉祥天を中心に諸仏に仏供を献じ、吉祥悔過の開白が開白導師により厳かに行われ、六時の行法にはいる。すなわち、後夜の悔過から始め、晨朝・日中の悔過をつとめ、夜になると日没から初夜・半夜の悔過を相次いで行う。こうした作法が7日間繰り返して行われる。

そして、正月14日の夜、半夜の行法が終わると結願の法会にうつり、衆僧ならびに参詣者が牛玉宝印をいただき、荘厳な法会の幕を閉じる。かつてこの法要は人の目にふれることのない行であったが、現在は、昼の「日中」、夜に始まる「日没」「初夜」の行が公開され、訪れる人も多い。



金堂



吉祥天



修正会

2 暮らしに息づく歴史と文化に関連する歴史的風致

斑鳩には、法隆寺境内で行われる伝統的仏教行事による歴史的風致の他、農業をはじめとする伝統的産業や人々の暮らしに結びついた民間信仰などの活動が継承され、歴史的な町並みと一体となって歴史的風致を形成している。

なかでも、法隆寺門前町の秋祭りにみる歴史的風致や、西里の民間信仰にみる歴史的風致、龍田集落の秋祭りにみる歴史的風致、小吉田集落の放生会にみる歴史的風致は、斑鳩の地域の多様性と歴史的風致を特徴づけるものとなっている。ここではこの4つの歴史的風致について、それぞれの特徴を整理するとともに、その歴史的風致を形成する建造物と人々の活動を詳述する。

ア 斑鳩神社の秋祭りにみる歴史的風致

法隆寺の周辺地域、旧法隆寺村といわれる東里・西里・三町・五丁町・並松の5集落は、法隆寺の建物の維持管理をはじめ宗教的行事や暮らしを支えるとともに、門前町として法隆寺とともに歩んできた集落である。鎮守社である斑鳩神社から氏神が法隆寺の御旅所に渡御し、これを地域の人々が太鼓台・提灯台を掲げて迎える伝統行事が「斑鳩神社の秋祭り」である。

東里は北小路ともいい、法隆寺西院と東院を結ぶ道路の北側にあり、東里の北の小高い山に斑鳩神社がある。五丁町は福井町・芝小路・芝の口・出垣内・市場の5つの町の総称で、西院と東院を結ぶ道路の南側の東部を占める集落で、かつては龍田から小泉に至る街道の中間にあたり小さな宿場町を形成し、宿屋や料理屋などで賑わっていたところである。三町は法隆寺南大門に至る松並木の東側、法隆寺参道の門前町として賑わいをみせていた本町・蘭町・魚町をいう。西里は法隆寺の西に隣接し、近世は大工集団の集落であった。並松は法隆寺南大門に至る松並木の入口にあたる奈良街道沿いの集落で三町とともに門前町を形成していた。

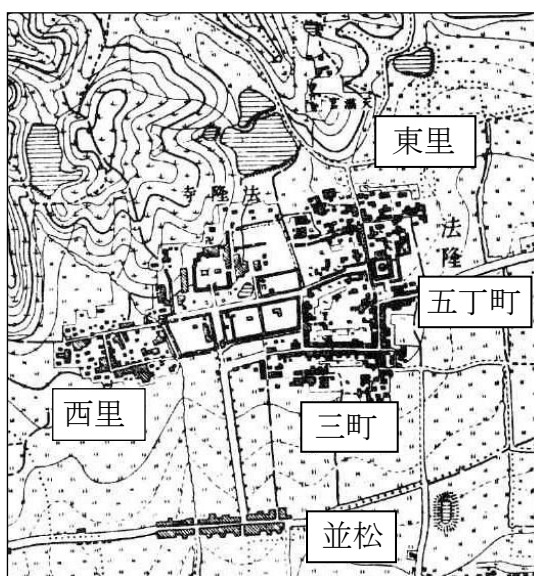


図2-6
旧法隆寺村(明治30年(1955)地形図より)

この5集落には、法隆寺とともに歩んだ門前町としての歴史と伝統を残す建築物と町並みが残る。



(1) 歴史的風致を形成する建造物

① 斑鳩神社

菅原道真を祀る斑鳩神社は、法隆寺の北側の小高い天満山に位置する。『古今一陽集』（延享3年(1746)成立）によれば、「天慶年中^{たんしょう}湛照僧都、はじめて御霊会を祀り給ひしより、以還、擁護の神と仰ぐ、・・・」とあり、菅原家の後裔である法隆寺第9代別当湛照僧都により、天慶年間(938～947)に法隆寺の鎮守社として天満山に創建されたとされ、祭礼儀式についても『寺要日記』（文安6年・宝徳元年(1449)成立）に記されている。初めは丘の麓にあったが、元亨^{げんこう}4年(1324)に現在の位置に遷座したといわれている。

社殿は素木の春日造一間社で、屋根は檜皮葺である。江戸時代・寛文8年(1668)以後明治3年(1870)まで順次造営され、向って左に1殿、右に2殿いずれも春日造瓦葺朱塗、この3殿に惣社・五所社・白山社・大將軍社など6社をまつ。拝殿は平屋瓦葺きで「天満宮」の額を掲げる。境内社の惣社・五所社・白山社の3社は、明治2年(1869)に法隆寺境内から遷したものである。

斑鳩神社は創建以来、祭祀や管理は法隆寺が司ってきたが、明治元年(1868)の神仏分離令布告により、明治2年(1869)より祭祀や管理を村民に移譲され、村民が「お天満さん」と親しく呼ぶ旧法隆寺村の鎮守社となった。



斑鳩神社社殿



斑鳩神社拝殿

② 井上家住宅

三町の本町通りには、淀城の城門を移築したと伝わる長屋門のある井上家住宅（旧北畠男爵邸）がある。『奈良県近代和風建築総合調査報告書』（平成23年(2011)3月）によると、主屋は、明治20年(1887)の築造である。かつて天誅組の生き残りでのちに裁判官となり男爵をもった北畠治房の家であった。

広い敷地の中に、主屋、蔵、離れ蔵があり、南に長屋門がある。主屋は、明治2年(1869)頃の築造と伝わり、本瓦葺き、木造二階建て、南面する正面右側に大きな車寄風玄関屋根が張り出している。町内では貴重な明治時代の近代和風建築のひとつである。



井上家住宅（旧北畠男爵邸）長屋門



井上家住宅主屋



図2-7 歴史的風致を形成する建造物の位置

(2) 歴史的風致を形成する活動

斑鳩神社の秋祭り

毎年10月の第2土・日曜日に斑鳩神社の秋祭りが行われる。この祭りは、旧法隆寺村の鎮守社「斑鳩神社」の神霊が神輿で法隆寺境内の御旅所へ渡御されるのを、旧法隆寺村5地区の太鼓台と子供提灯台が出迎える儀式である。

「御旅所渡御還御供奉之次第」『天満宮祭礼記』（明和3年(1766)成立）によれば、中断していた金堂と五重塔の間を御旅所とする渡御が復活したと記されている。その後、江戸時代後期の文化年間(1804～1818)に神輿迎えの太鼓台が登場する。明治元年(1868)の神仏分離令から一時期は中断したが、明治10年(1877)に復活し、御旅所の位置も食堂前広場（綱封蔵東広場）となり現在に至っている。

宵宮の午後、本殿から神霊神輿が氏子たちに担がれて山を降りる。宮司・天狗・御旗・唐櫃、そして稚児（女兒）行列にひかれる神輿の渡御行列を、東大門下で五集落（三町・西里・東里・五丁町・並松）の太鼓台と提灯台、合計10台が連座して迎える。各太鼓台には太鼓たたきの男子と襷装束した数人の稚児（男児）が乗っている。



『天満宮祭礼記』

■各町の太鼓台



西里自治会



東里自治会



三町自治会



五丁町連合会



並松自治会

東大門下からは三町が先導して御旅所に向かう。三町太鼓台が打ち鳴らす太鼓の響きに合わせて「ヨイサー、ヨイサ」とかけ声をかけながら、その後に三町子供提灯台、続いて神輿渡御行列、その後に西里～東里～五丁町～並松の太鼓台と子供提灯台の8台が続く。

東院前から芝ノ口・本町通りを経て、最大の難所といえる南大門をくぐり、神輿は法隆寺綱封蔵東側の広場の御旅所に安置される。お供した太鼓台・提灯台の10台は、大宝蔵殿と鏡池の間にある広場の昔から決められた場所に毎年据える。



綱封蔵東広場（御旅所）



渡御行列を先導する天狗



御旗に続く巫女



東大門の神輿



東大門の太鼓台



神輿を引く稚児行列



太鼓台に乗る稚児（男児）



南大門をくぐる太鼓台



広場に集まる太鼓台・提灯台



提灯台を引く子供たち



法隆寺境内の太鼓台

夜になると、再び氏子たちは境内の太鼓台・提灯台に集まる。太鼓台は飾提灯をろうそく提灯に代える。境内の闇の中に御旅所の神灯があり、太鼓台・提灯台に明かりが入る。やがて「ドドドド」という太鼓の早打ちで担ぎ手が集まり、「サー」のかけ声と、「カチカチカチ」の拍子木で一斉に肩が入り、「ドーン・ドーン・ドン・デン・ドン」と太鼓の打ち出しで境内広場に出る。闇の中を東大門と西大門の間の広場を2台と3台の2組に分かれて何回か往復する。太鼓台・提灯台がすれ違うとき、太鼓の音は一段と強く、かけ声も一段と大きく、上下に揺すって力比べをする。村仲間が一団となり、声を張り上げ、闇の中、観客と一緒に盛り上がる。夜も更けて太鼓台・提灯台は各地区に持ち帰り、翌日の本祭りに備える。

本祭りの日、太鼓台・提灯台は午前中各集落内を巡行して、午後一番に宵宮と同じ定位置に集まる。御旅所では、法隆寺と住民の安泰と五穀豊穡を感謝し、変わらぬ豊かな暮らしを祈願して、巫女による神楽奉納（浦安の舞）があり、氏子は自由に参拝する。5集落の太鼓台・提灯台は、宵宮と同じように、2組に分かれて担ぎ比べをし、氏子・住民・観客が一体になって盛り上がる。

午後3時、西里の太鼓台・提灯台が先導して、神輿渡御行列、4集落の太鼓台・提灯台が続き、御旅所から東大門前に向かう。東大門下で各集落の太鼓台は担ぎ比べをし、盛り上がったのち、神霊神輿は往路と同じ道筋を天満山本殿へ帰っていく。東大門下で5集落の太鼓台・提灯台10台が連座して送り、祭礼は終わる。



天満山に帰る神輿行列

祭礼における太鼓台が、神輿とともに法隆寺境内に入る順序は、三町～西里～東里～五丁町～並松となっている。これは製作された順序であると伝えられており、現在最も古いとされるのが三町の太鼓台である。大方氏の寄進と伝えられる三町の太鼓台には薬玉がつるしてあり、5台中最も立派である。

『身元宜敷者取調帳』（天保9年(1838)成立）によると、大方氏の石高は167石9斗で法隆寺村筆頭、当時の高取藩屈指の豪商であったとされる。当時大方氏は油しぼり業を生業とし、多くの若者が働いていたが、祭休みで悪い遊びを覚えないうにとの配慮から、太鼓台を担ぐことを思いつき、寄進したといわれている。

宵宮、本宮の斑鳩神社の神輿に連なる御旅所への巡行ルート（東大門下から東院前～芝ノ口～本町通り～南大門）は、かつて在原業平が通ったとされ、門前町として栄えた五丁町、三町の歴史的建築物が数多く残る町並みを持つ古道である。

ほかに、本町通りには、近代の歴史的建築物と思われる建築物が残っている。井上家住宅（旧北畠男爵邸）の西約100mには、大正14年(1925)頃の築造とされる虫籠窓を持つ松井家住宅があり、南大門の東約100mには、明治33年(1900)頃の築造と伝えられる中規模町家である石原家住宅がある。

南大門前の参道の松並木は、弘長元年(1261)後嵯峨上皇の行幸に際し「東西郷民左右二植松ヲ云々」の記録があり、地域の人々により松が植えられたようである。参道松並木の入口は現在国道25号からのようにになっているが、その南に「右いせ・・・」と書かれた道標が建っていて、ここが奈良街道から法隆寺への参道の入口であり、並松の街の中心でもあったところであり、明治から昭和初期まで、法隆寺銀座といわれる盛況ぶりであった。

法隆寺周辺地区の5つの地域の人々に手によって担がれる斑鳩神社の秋祭りの太鼓台は、東大門の東に集合し、西院と東院を結ぶ参道に連なる長い土堀に沿って並べられ、神輿の到着を待つ。そして、神輿渡御行列とともに太鼓台は法隆寺境内の御旅所に向かう。



本町通りを巡行する太鼓台



松井家住宅



石原家住宅



並松の道標



井上家住宅をはじめとした歴史的建造物が建ち並び古い家並みを背景に、衣冠束帯姿の宮司、天狗、御旗、巫女、華やかに着飾った稚児、きらびやかな神輿に続き、赤い布団を重ねた色鮮やかな太鼓台と はっぴ姿の担ぎ手の行列が通り過ぎていく。法隆寺の南大門にさしかかると、「ヨイサー、ヨイサ」のかけ声のもと威勢よく担ぎ上げ、ぎりぎりの幅しかない南大門を次々とくぐり抜けていく。ここは各太鼓台担ぎ手の腕の見せ所である。

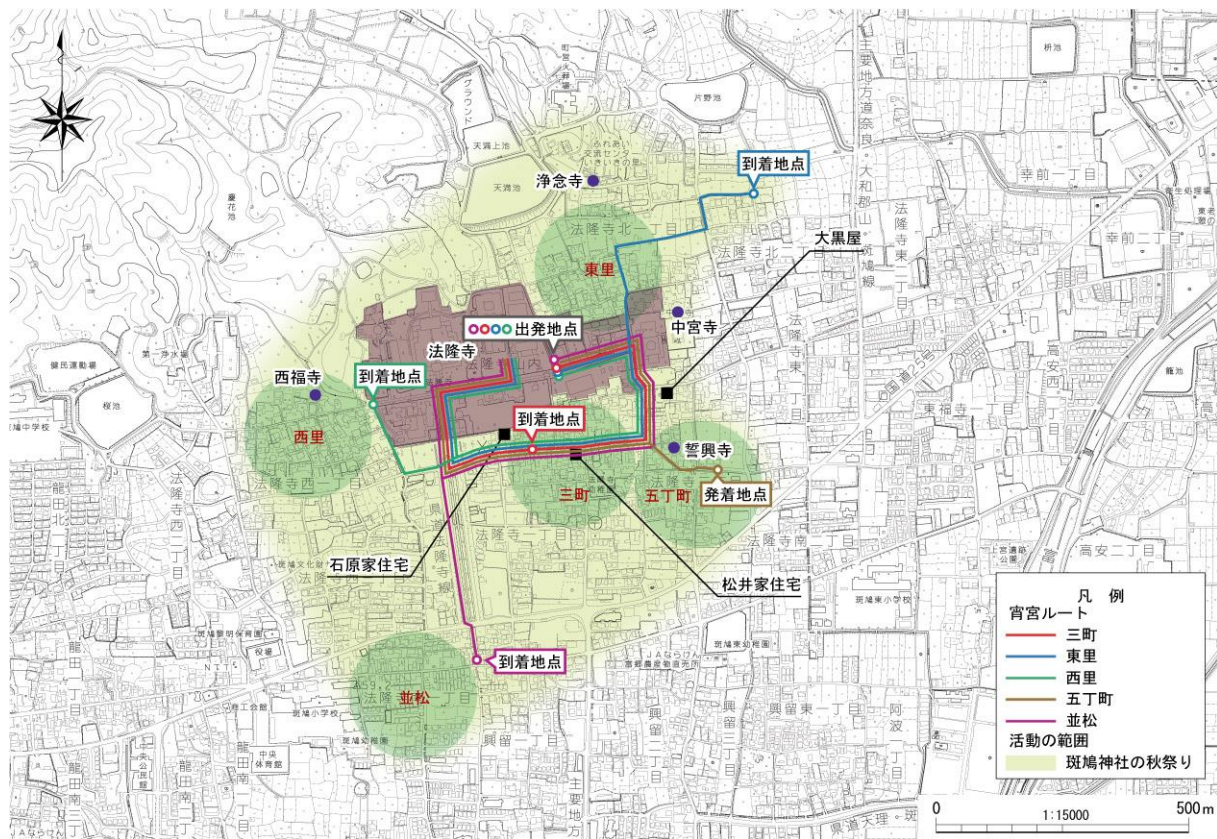


現在の松並木

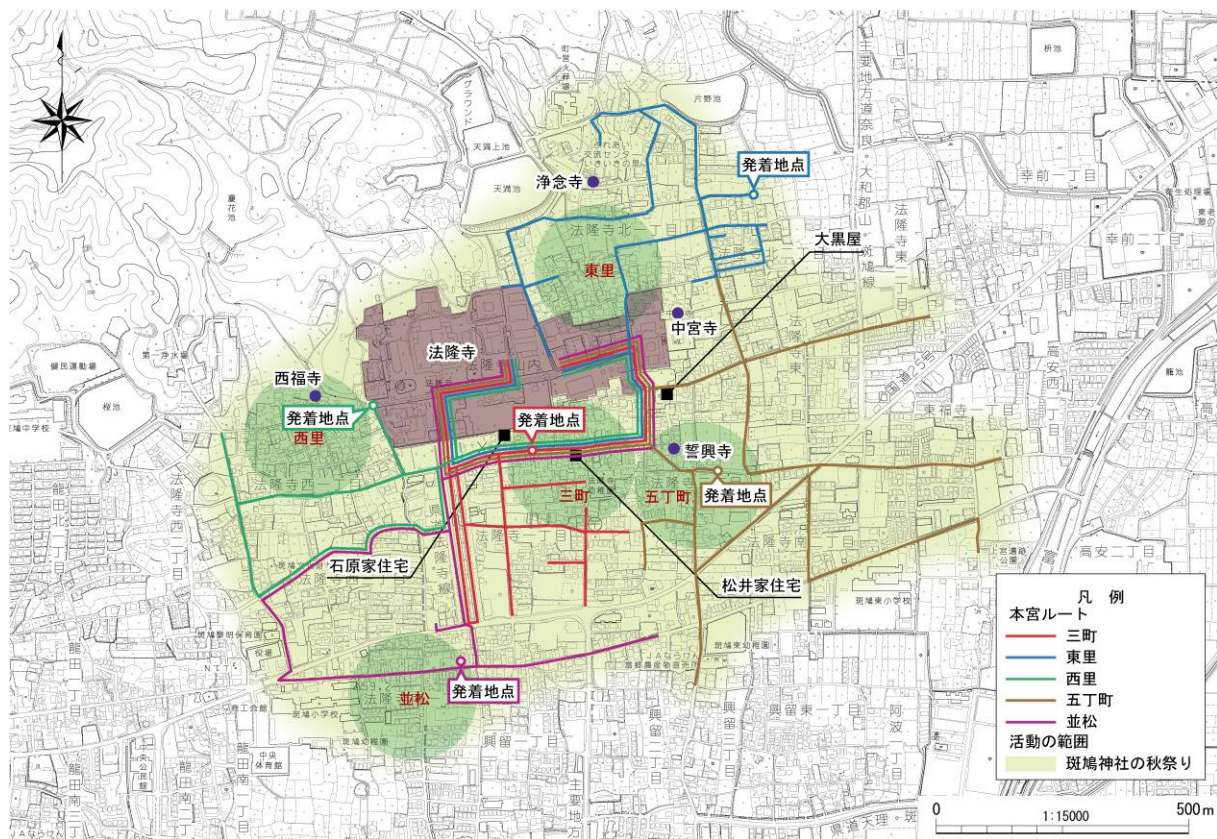
法隆寺境内の東西方向の長い参道では、各太鼓台がすれちがいざまに、太鼓の打ち出しとともに担ぎ手が一団となって「ヨイサー、ヨイサ」の声を張り上げ、より高く太鼓台が担ぎ上げられ、太鼓台の飾提灯に明かりが入った赤い飾提灯が夜空に揺れ、観客はその神賑わいの勇姿と美しさに酔いしれる。

この秋の祭礼が終わると、斑鳩の里は黄金色に輝くたわわに実った稲刈りの本番の季節を迎え、斑鳩の里は秋一色の気配を漂わせる。

■ 斑鳩神社の秋祭りの巡行ルート



宵宮ルート



本宮ルート

図2-8 歴史的風致を形成する人々の活動の範囲

コラム：旅館「大黒屋」

夢殿の南側、芝の口といわれた付近は江戸から明治時代にかけて龍田神社前に次いで、奈良街道の宿場町として宿屋や料理屋があったところである。ここに明治10年(1877)頃、鴟尾をのせた木造三階建の本館と二階建の別館からなる旅館「大黒屋」があった。大黒屋には明治・大正・昭和にかけて、斑鳩の里を訪れた志賀直哉・高浜虚子・木下利玄・里見淳・芥川龍之介・堀辰雄、速水御舟、北村西望などの宿泊した記録が残されている。明治40年(1907)に高浜虚子が大黒屋で書き上げた『斑鳩物語』には当時の風情がよく描かれている。



昭和40年(1965)頃の大黒屋

(3) まとめ(暮らしに息づく歴史と文化に関連する歴史的風致)

旧法隆寺村の5集落は法隆寺の門前町としての歴史を持ち、伝統的町並みが現存する地域である。祭りの巡行ルートも歴史的建造物が多く佇む古道であり、落ち着いた雰囲気にある旧法隆寺村も、祭りの日には神輿や太鼓台、子供提灯台で賑わいを見せる。

このように斑鳩神社の秋祭りは、神社だけでなく重厚な町並みと祭礼行事が密接に結び付いた歴史的風致を形成している。

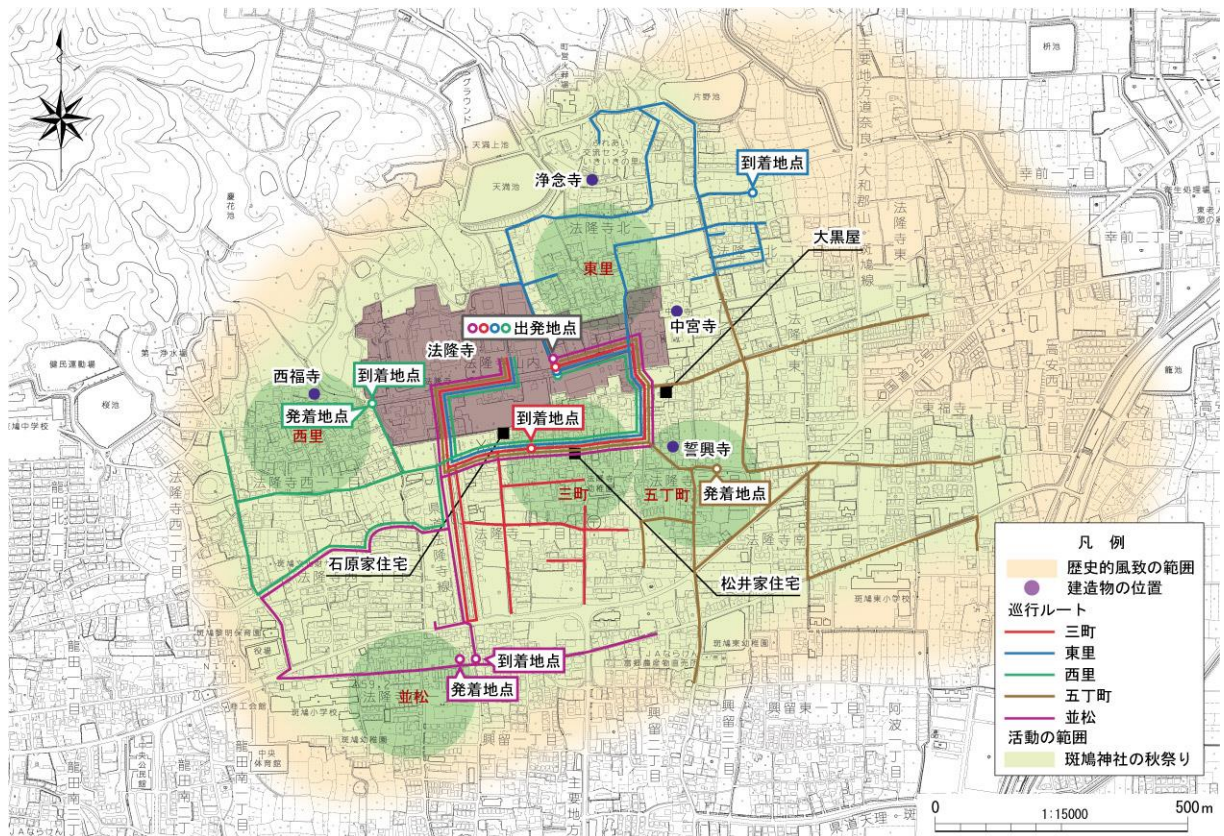


図2-9 斑鳩神社の秋祭りにみる歴史的風致の範囲

イ 西里の愛宕講など民間信仰にみる歴史的風致

西里は、法隆寺の西に位置し、街道から離れて古い町並みを残している。ここは法隆寺出入りの大工たちの居住地であった。都が奈良から京都に移り、多くの大工集団は京都に移っていったが、法隆寺村では農業を営みつつ大工集団の伝統が継承されてきた。ここでは、法隆寺の維持管理をはじめとする伝統的技術の継承とともに、大工の職業神としての聖徳太子信仰、春日講、防火の守護神の愛宕神社へ代参する愛宕講など民間信仰による伝統行事が一体となって継承されている。

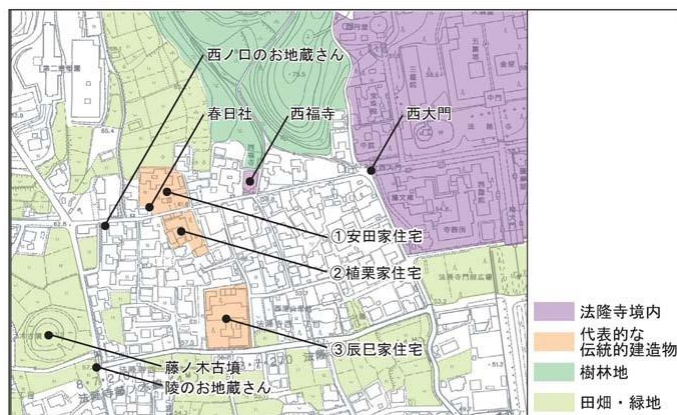


図2-10 西里集落の歴史資源

西里は、斑鳩町の中でもとりわけ旧集落の佇まいをよく残し、落ち着いたある美しい町並みを形成している。集落内の道路は幅員3m足らずで、四つ辻（十字路）はなく元来の町並みを留めている。道路沿いは一部は長屋門や蔵の壁だが、ほとんど塀が巡らされており、連続する塀や壁の奥に樹木とともに主屋の屋根を望む町並みとなっている。



西里の町並み

西里で社寺建築に関わった大工集団に、中井家と安田家がある。江戸時代の初め、法隆寺村の大工たちは、西里出身の大工頭である中井大和守正清に率いられ、法隆寺の慶長の大修理ほか、二条城などの造営に従事していた。安田家も中井家配下の大工棟梁として、普請・作事に従事していた。その後中井家が京都に役所を構え、多くの法隆寺村の大工棟梁も京都に移っていったが、西里には安田武太夫家が残った。この安田家は、京都での普請・作事に関わる一方で、法隆寺の伽藍や子院の建物の恒常的な維持管理に関わるとともに、法隆寺大工たちの守護神である聖徳太子の像を祀り、大工の信仰の拠点となる修南院を守ってきた。また、安田家住宅の向かいには、西岡常一氏の祖父が明治3年(1870)頃に建てたという植栗家住宅がある。長屋門の腰板には船板の古材が使用され、安田家住宅の土壁とともに法隆寺の西大門からまっすぐに伸びる道に面し、美しい町並み景観を形成している。



植栗家住宅

こうした歴史的町並みを残すとともに、西里の集落内では、愛宕講・春日講・伊勢講・日待講・六斎講など多くの講が営まれ、現在では希薄となってきた信仰をよりどころとした地縁社会を形成してきた。



(1) 歴史的風致を形成する建造物

① 安田家住宅

安田家は、町内最古の民家が残っている宮大工の家として知られるとともに、安田家に残されている『安田家文書』（斑鳩町指定文化財）（江戸時代成立とされる）は、貴重な江戸時代の大工集団の資料となっている。

現在残る安田家住宅は、西里集落の北西に位置する。南に門と供部屋があり奥まって大和棟の主屋と接続するつのや座敷や土蔵などが複雑に改置されている。主屋は桁行6間、梁間は二ワで3間と4分の3間、身舎梁間は3間半で右勝手、喰い違い4間取り型民家で、屋根は大和棟となっている。慶長年間(1596～1615)から敷地、屋敷の位置は変わっていないが、正徳5年(1715)から明治9年(1876)までの改造部分の記録が残っている。



安田家住宅門構え

② 辰巳家住宅

西里集落の南東側、業平道といわれる古道に接して辰巳家住宅がある。広大な敷地内にある、主屋、長屋門、茶室、蔵、米蔵など12棟の建物と土塀が登録有形文化財に登録されている。これらは大正4年(1915)に辰巳櫓太郎氏により建てられた。主屋は、二階建、入母屋造、棧瓦葺、間口30mにおよぶ大型の建物で、1、2階とも床棚を備えた座敷を配している。外観は民家の形式を踏襲しているが、内部は良材をふんだんに使った格調高い書院の意匠となっている。そして、敷地を囲む土塀は、西里集落の景観を特徴付ける一つとなっている。全体に中塗り仕上げで、軒を蛇腹状に塗り込め棧瓦葺の屋根をのせ、基礎の石垣は隙間のない見事な亀甲積みで、高く築かれた南面では優美な曲線をつくり、壮大な屋敷構えを構成する主要要素となっている。



辰巳家住宅



辰巳家住宅長屋門



図2-11 歴史的風致を形成する建造物の位置

(2) 歴史的風致を形成する活動

① 西里の愛宕講

西里の西ノ口垣内では、火災の災禍から逃れられることを願い、愛宕山大権現社が祀られ、愛宕講が続けられている。安政4年(1857)に栗原土佐が文章を撰し、大工棟梁家の安田下総掾幹茂が記した「奉勸請愛宕山大権現社」の御札が現在でも講に引き継がれていて、寛政4年(1792)と寛政6年(1794)に発生した集落内の火災に際し、安田武太夫休茂の母が地域の人々の賛同を得て発願し、60余年怠ることなく信仰されてきたことが記されている。また愛宕講に係る金銭の差引簿である『愛宕講有銭覚帳』は、天保2年(1831)からのものが確認でき、江戸時代後期の西里における信仰の一つの姿を明らかにしてくれる。現在でも形態は変えながらも信仰は引き継がれており、毎年末に当屋2軒を選び、翌1年間に村中に火災のないことを願い、防火の守護神である京都の愛宕神社に代参して、愛宕大神守護所の祈祷札を賜り、講中に配るとともに、旧村内3か所にお札を貼り、お札箱を「愛宕さん」と称して灯明を上げて、講中一軒ずつ順送りする風習を伝えている。安田家住宅の主屋の玄関口などにおいては、江戸時代後期頃からの祈祷札を見ることができる。



「奉勸請愛宕山大権現社」御札



また、同じ西里の西ノ口垣内において信仰されている春日講は、安田家住宅の南西に所在する春日古墳墳丘の南裾に安置されている朱塗りの春日造の小社である春日社に起因するもので、大工集団を中心に信仰を集めてきた。この春日講に係る文書は伝わっていないが、『安田家文書』には、元禄元年(1688)に遷宮したことを記した書付や文政12年(1829)に修造したことを記した文書があり、信仰の拠り所となっていた春日社



春日社



愛宕講のお参り

の来歴を知ることができる。年代は不詳ながら『和州平群郡法隆寺村西里春日社灯明日膳地日覚・春日社支配順番之覚』では、春日講による春日社の日常的な維持・管理のあり方を知ることができる。こうした春日講の信仰は、現在も継承されており、毎年当屋を持ち回りで勤めて、12月16日に春日社にお供えをし、講中は当屋で春日権現の掛け軸を前に集う。

コラム：大工集団の伝統技術を伝える活動

西里と東里の大工集団は、法隆寺をはじめ社寺・城郭などの大工技術を伝承してきたが、江戸時代になって、専業大工は京都に移り、西里と東里に残った大工は農業をしながらも、法隆寺の維持に貢献してきたと考えられている。法隆寺境内に、飛鳥時代から江戸までの、各時代の建物が保存されているのは、築後約300年ごとの大修理やその間の約100年ごとの小修理など、聖徳太子の寺を護持してきた寺僧の気配り・管理と大工の補修が行き届いたからだといわれている。近年の法隆寺の棟梁としては、法輪寺の三重塔や薬師寺の金堂や西塔の再建を手がけた、宮大工で選定保存技術保持者となった西岡常一がいた。また西岡常一の唯一の弟子といわれる小川三夫は、鵜工舎を設立、社寺建築の伝統技術を伝承している。

法隆寺iセンターは、法隆寺参道東側に位置する斑鳩町の斑鳩の里観光案内所であるが、2階では法隆寺を支えた大工集団の伝統技術を後世に伝えるため、大工道具を継承して展示している。また小学校でも子供たちに大工の技術体験をさせている。



カンナを学ぶ小学生



ヤリガンナ

② 西里の地藏会

地藏会は、現在でも西里だけでなく斑鳩町内の各地に残されているが、回り地藏は、西里における古い地藏信仰の形態を今に伝えるものである。その由来については、法隆寺中院の権少僧都千晃により、に記された『顛末記』（安政6年(1859)成立)にある。これは、安政の流行病の際に西里からは一人の死者も出すことがなかったことから、地藏尊の寶龕（^{ほうがん}厨子）を修理することとなり、その古い銘文が磨滅してわかりにくくなってきたことから、その内容を記載したものである。これには、この地藏尊は聖徳太子の作と伝え、古くから中院と西里の各戸を日々順次迎えて供養していたもので、慶長20年(1615)の大坂の陣に際し、中井大和守正清邸が豊臣方の焼き討ちにあった際に中院に安置されたが、再び昔の習わしに戻って西里の各戸を絶えることなく回ることとなり、御利益もより一層新となった。こうしたことから、法隆寺村で病死が100余人発生した数年にわたる流行病においても、この地藏尊の御利益により西里からは1人の死者も出すことがなく、村人のこの地藏尊の御加護への信仰はより篤くなった。こうした地藏尊の御恩に報いるため、地藏尊の寶龕を修理することとなり、北室院の一派大和尚による供養を中院で執り行い、そこには多くの西里の村人が参集したと記されている。

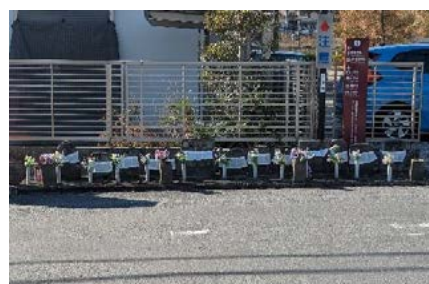
この回り地藏は、現在でも安田家、辰巳家を含む西里で引き継がれており、厨子（奥行き25cm×高さ40cm）に収められている地藏尊が、旧村内の約60戸を一戸ずつ順送りされて行く様子を見ることができる。地藏尊を迎えた家では、花ともち米と供物を新しく替えて、灯明と線香をあげ、一晚この地藏尊をお泊まりいただいてから次の家にするというものである。

これを多くの人々で祀る行事も地藏会として継承されている。これは毎年8月24日の地藏盆に、子供が元気に育つことを願って、回り地藏を西里会館に祀り催される（以前は西福寺で行われていた）。そして、この世話をしているのが70歳以上の女性が加入する尼講である。

同じ8月24日には、西福寺（西里会館）だけでなく「垣内の地藏会」も行われている。西里では、みょうぶのお地藏さん（東出屋敷）、^{みさぎ}陵のお地藏さん（畑中）、西ノ口のお地藏さん（西ノ口）で行われる。陵のお地藏さんは藤ノ木古墳のすぐ南東の道端にある。昭和30年(1955)頃までは野仏地藏さんの前にゴザを敷き、お供えをして夕方から提灯をつけ、^{かね}鉦たたき導師を真ん中に、周りに浴衣を着た子供が輪になって座り、鉦にあわせて祈り数珠を繰ったが、今はお祈りだけをしている。



回り地藏の厨子



陵のお地藏さん



西ノ口のお地藏さん



図2-12 歴史的風致を形成する人々の活動の範囲

コラム：藤ノ木古墳を守ってきた西里の人々

法隆寺の西方約400m、西里集落の西側に藤ノ木古墳がある。

藤ノ木古墳の南側には古墳に隣接して建っていたという宝積寺があった。法隆寺に伝わる文書によると、宝積寺は宝永2年(1705)には、法隆寺末寺の宗源寺の管理となっており、宗源寺に伝わる文書には、「陵山王女院宝積寺」と記されており、この陵山は「宝積寺境内図」の崇峻天皇御廟とされている。また、『宗源寺過去帳』によると安政元年(1854)に、宝



藤ノ木古墳

積寺において尼が焼死した記事があり、その2年後にこの地を訪れた伴林光平の『巡陵記事』において宝積寺焼失後は田となっていることが記されている。また、発掘調査によっても、ほぼ文献を裏付ける出土遺物が発見された。西里では、先祖からの伝承でも、藤ノ木古墳を「ビシャツキヤマ(陵山)」と呼んでいたといわれ、藤ノ木古墳が約1400年の間未盗掘で守られてきた背景には、宝積寺とともに西里の人々によって守られてきたからと考えられる。現在は、藤ノ木古墳の維持管理を目的としたボランティアが古墳の草引きや清掃活動を行っている。

(3) まとめ

西里は古くから社寺建築に携わる大工集団の居住地として、美しく整然とした伝統的町並みを形成してきた。また、大工集団を中心に信仰を集めた愛宕講や古くから続く地蔵会といった民間信仰が、人々のよりどころとして現在まで連綿と続いている。

西里では、大工集団の営みの歴史に裏付けされた町並みや民間信仰を中心とした伝統行事が深く結びついており、特徴ある斑鳩町の歴史的風致のひとつである。



図2-13 西里の愛宕講など民間信仰にみる歴史的風致の範囲

ウ 龍田神社の秋祭りにみる歴史的風致

龍田神社を中心とした奈良街道沿道の龍田集落は、古代・中世は法隆寺の鎮守社として法隆寺の法会などに猿樂などを奉仕し、また中世には戎神を勧進して龍田市が誕生、門前町とともに近郷の中心的市場として栄えてきた。近世には城下町として拡大するとともに、さらには奈良街道を軸とする伊勢参り、太子信仰の道としても全国からの旅人の往来があり、市場、門前町、宿場町として街道の町並みを形成するとともに、西大和の中心的市場として発展してきた。近世から近代には、さらに竜田川の紅葉など自然環境を生かした行楽の場としても発展してきた地域である。

今も、歴史的な町並みが残る奈良街道沿いでは、龍田神社の秋祭りをはじめとする伝統行事とともに、法隆寺に仕えた猿樂を発祥とする能楽を伝える活動が行われている。

（１）歴史的風致を形成する建造物

龍田神社

龍田神社は、正面に拝殿、奥中央に本殿、右に1社殿、左に3社殿、境内社として龍田恵比須神社、弁財天社など9社が配置されている。

社殿は何度か造営・補修されて現在に至るが、昭和51年(1976)には拝殿が花火で火災を起こし、再建されて現在に至っている。

境内の石灯籠は、江戸時代から各時代にわたって寄進されているが、江戸時代のものとして承応4年(1655)に油屋治左衛門、享和元年(1801)と文政5年(1822)に加護屋久左衛門がそれぞれ奉納し、社務所の庭には延宝元年(1673)の石灯が残っている。また、石造狛犬は文化4年(1807)に大坂の吉田屋伊兵衛が奉納したものである。

龍田神社は『聖徳太子伝私記』（重要文化財、顕真撰、嘉禎4年(1238)成立）によれば、飛鳥から来た聖徳太子が法隆寺建立を、立野の龍田本宮に祈願し、龍田大明神を法隆寺の守護神として勧請したと伝え、以来龍田神社と称し、この地をも龍田と称するようになったと伝えている。また、『龍田本宮縁起』（成立年代不明）によると龍田新宮の建立は飛鳥時代中頃とある。

龍田神社の創祀は明確ではないが、社伝によれば現在の境内の北方御廟山（御坊山）が龍田における神奈備で三室山であるといい、龍田神社は、もとはこの山に創祠され、のちに南麓に遷宮したものと伝えている。「明細絵図」『御宮司家文書』（明治3年(1870)成立）には北庄の北後に龍田社旧跡と明記されたところがあり、「龍田新宮芝絵図」『福井家文書』（江戸後期成立）



龍田神社



龍田神社の狛犬、石灯籠

には同書を竜田末社と記している。また、「境内明細絵図」『御宮司家文書』（明治2年(1869)成立）には正面に現在の如く4殿が並んでいる。龍田神社は、かつては法隆寺が管理を行っていたが、明治の神仏分離令により、法隆寺から離れ、立野の龍田本宮の摂社となり、本宮からはお渡りがあり御旅所となっていたが、大正11年(1922)には龍田本宮とも全く分離独立した。

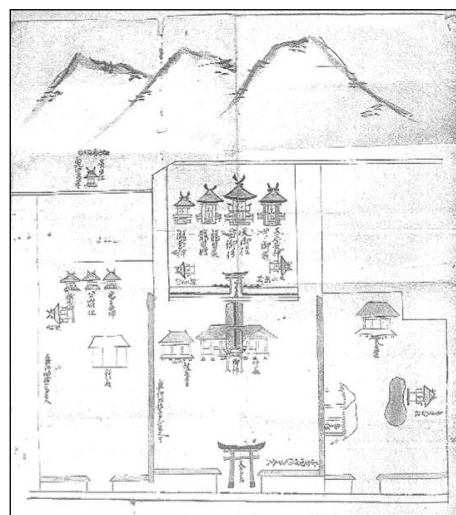
龍田神社では、神仏習合の中法隆寺の別当坊が置かれ、法隆寺の支配を受けていて、「龍田会」または「龍田三十講」と称され、例祭において法隆寺の僧侶30人が参加して法会が執り行われたことが伝えられている。また、鎌倉時代に法隆寺の僧により記された『嘉元記』（重要文化財、東京国立博物館蔵『1996法隆寺献納宝物』、南北朝時代成立）は、嘉元3年(1305)から貞治3年(1364)までの約60年間の法隆寺またはその周辺で起きたさまざまな記事を年代順に纏められたもので、その元応2年(1320)の記事には、10月に雨悦びの田楽を龍田神社前にて奉納したとあり、その時期が10月であることから、明らかに豊作を願っての秋の祭礼に伴う奉納であると解されるが、秋の祭礼に伴い北庄や服部といった近隣の集落からの御供を龍田神社に供える龍田参りの記事もみられる。龍田神社が後の金剛流能の発祥の地と解されている所以は、こうした中世における龍田神社に奉納される各集落による田楽・猿楽の芸能の昇華した形と考えられているからである。

龍田神社の『境内古図』（江戸時代初期成立とされる）には、『嘉元記』（南北朝時代成立）にもその建立のことが記されている楼門の西方に、北庄やいなばといった近隣集落の名を冠した仮屋が描かれている。この仮屋は龍田参りの際の各集落の詰所であり、これらの建物は現在失われているものの、第二次世界大戦後もしばらくは存在していた。また、この仮屋については、「三里条々規式」『服部神楽講文書』（応永25年(1418)成立）には、各所の仮屋を祭礼時の詰所として使用し、飾り付け茶所や相撲取役人の幕屋として利用していることが記されていて、龍田神社の祭礼の歴史の古さをうかがうことができる。

このように、中世より現在まで連綿と受け引き継がれてきた龍田神社の祭礼は、地縁社会を結びつける龍田地区の精神的支柱の一つとして行われてきた。

また、法隆寺の『寺要日記』（宝徳元年(1449)成立）によると、後嵯峨天皇の寛元元年(1243)3月22日夜、摂津の西宮戎神社より福德開運・商売繁盛の神・戎神を勧請、この勧請の際には法隆寺の西郷・東郷及び近くの郷民が入れ替わり立ち替わり猿楽を演じたと記されている。これ以降ここに龍田市がたち、生活用品や食料品の店が境内いっぱいになりび盛況を呈し、当時の南都・興福寺に発生した市場に較べても屈指の市場であったといわれている。そして、平群四十八郷（現在の生駒郡、大和郡山市）の中心的市场となり、龍田の門前町は奈良街道の商店街として拡大発展していくことになる。

近世、慶長6年(1601)に片桐且元の龍田陣屋が築造され、龍田藩が成立してから廃藩とな



龍田神社『境内明細絵図』



る明暦元年(1655)までは城下町でもあった。廃藩後も、江戸時代の農業生産力の向上や、手工業品の拡大などにより、周辺在郷から商品が持ち込まれ龍田市も活況を帯びたといわれている。ことに竜田大橋の西詰は奈良街道と龍田から平群・生駒に通じる清滝街道の交差点となり、龍田のまちの西の玄関口として賑わったと伝えられる。さらに、江戸時代中期からは商業的農業が進展し、近郊農家の米・実綿・菜種などが龍田に持ち込まれ、酒・繰綿・油に加工され、各地に販売されたようで、安永2年(1773)には絞油屋が12軒あり、油粕を肥料としても販売している。嘉永4年(1851)には酒屋が3軒あったとされる。寛政12年(1800)には龍田村大字龍田で屋号のある商店は121軒に及んだとされ、この中で借家は14軒、文化3年(1806)には24軒に増え賃貸業が成立していることがわかる。

近世は民間信仰も盛んな時代でもあり、奈良街道は大坂から伊勢への街道であり、法隆寺・龍田神社・信貴山・当麻寺・太子廟など聖徳太子ゆかりの社寺参りの交差点が龍田であった。このように、奈良街道沿いの龍田集落は、商業・門前町が拡大し宿場町としての機能も整えて賑わっていたといわれている。

『大和名所図会』(秋里舜福著、寛政3年(1791)成立)には、「法隆寺より六七町^{ひつじさる} 坤」にあり。民家軒をつらねて、龍田町といふ。」「龍田の町を西へ出づれば川あり、是龍田川なり……龍田山・龍田川の和歌、二十一代集の内百二十一首あり」とあり、龍田神社から竜田川が江戸時代後期には賑わいと行楽の場の名所であったことが記されている。



立田新宮『大和名所図会』寛政3年(1791)



龍田川『大和名所図会』寛政3年(1791)



また、龍田の奈良街道の市の賑わいとともに、竜田川の風光明媚も幸いし、江戸時代から明治にかけて近郷はもちろん、竜田川の紅葉目当てに遠くから人が集まり、河畔に旅館・料理屋が並び、龍田の街道筋の賑わいは、鉄道の敷設により町の中心が鉄道駅に移行する大正期まで続いた。

この斑鳩の郷社的存在であった龍田神社の祭礼には、周辺の各集落が奉仕したとされるが、現在では北庄の元宮座(春日講)のみが伝統的な衣装やお供えて龍田参り(龍田神社の祭礼への参加)を続けている。

北庄は龍田神社の北方、矢田丘陵の南斜面の集落で、春日神社は、北庄の集落のほぼ中央にある。社殿は春日造檜皮葺で、朱の玉垣をめぐらす。拝殿は平屋瓦葺、石造狛犬は安政2年

(1855)春に氏子が奉納したものであり、石灯には延宝9年(1681)に奉造したものがある。

春日神社には、本殿の屋根は20年ごとに葺替えの記録が残り、昭和35年(1960)の葺替え工事のとき、棟木に宝徳2年(1450)の建立記録がみられたが、創建はもっと以前と考えられている。中央に天児屋根命、右に須佐男命、左に武甕槌命を祀る。

祭祀は元宮座^{かきゆい}十人衆が取り仕切り、年中行事として「六日座」^{ごへい}「垣結」があり、龍田神社の秋祭りには御幣を持参して参列する。この御膳供えとお渡し迎えは龍田神社の10月祭礼の2日前に当屋に十人衆が集まり、龍田神社へ供える神饌の餅を搗き、鯉や十六餅のほかお供えをつくる。本祭の朝、宮座衣装に着替え、作った御膳をホッカイ(唐櫃)に入れ座内一同お供えに行く行事である。



春日神社



お供え



北庄元宮座

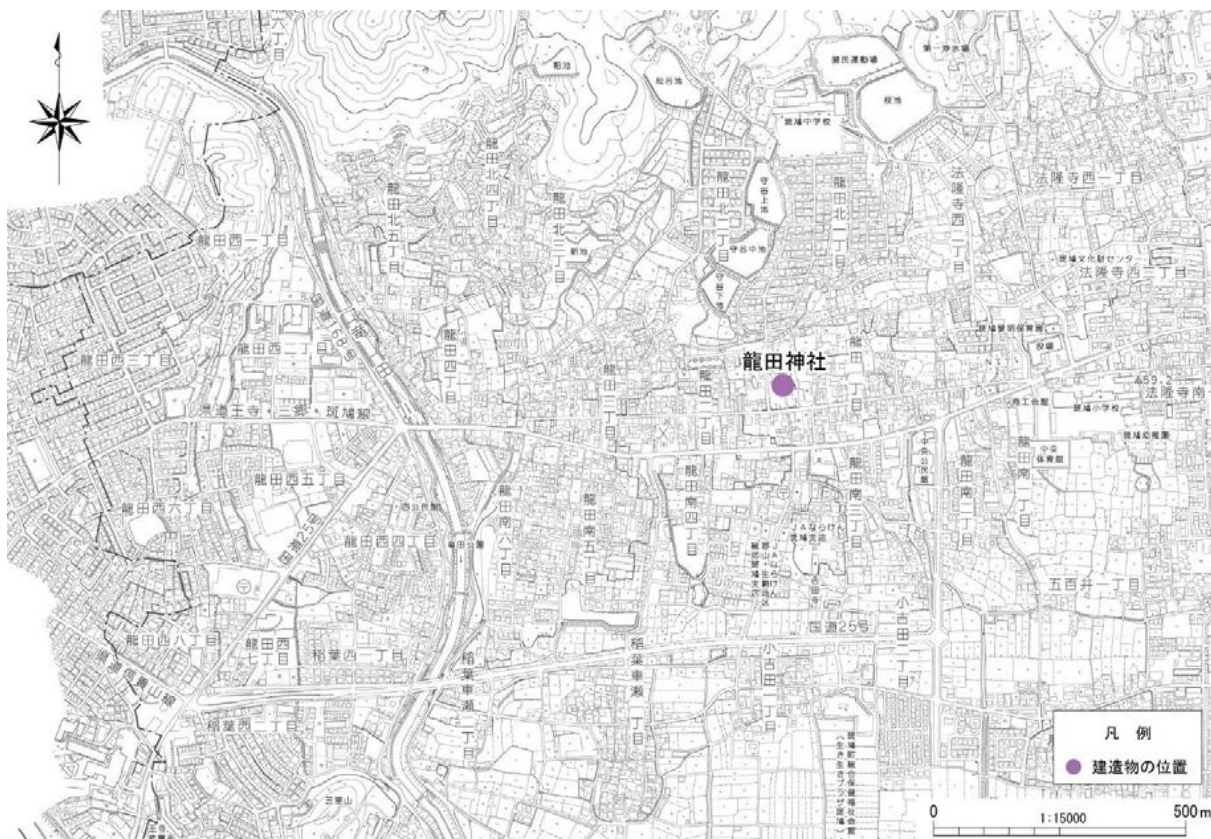


図2-14 歴史的風致を形成する建造物の位置



(2) 歴史的風致を形成する活動

龍田神社の秋祭り

龍田神社の秋祭り（神楓祭）は、毎年、10月15日に近い土・日に行われている。宵宮には、神前に供物を調え、氏子総代12名や稚児が集まり、夕方から神事が行われ、拝殿に子供神輿2基と境内に太鼓台3台（龍田青年団・東部・北部）が据えられ、太鼓の音が夜空に響き祭り気分を盛り上げる。

本祭りは10時から神事が行われ、13時から渡御行列が東御旅所（南都銀行法隆寺支店西側）へ向かい、氏子家内安全祈願の後、小休止して西御旅所（猫坂）へ向かい、同じく神事を終えて16時頃に本殿に戻る。渡御行列は、宮司・氏子総代・自治会役員・獅子舞に続き、子供神輿2基・稚児・提灯台3台も参列、そして氏子たちが担ぐ太鼓台3台の音が祭り気分を盛り上げて街道筋を練り歩く。渡御終了後は、宮司が氏子総代・自治会役員などを交えて直会^{なおり}を催し、祭礼は終わる。

龍田神社の秋祭りの太鼓台の起こりは定かではないが、明治後期に龍田東部町内会に寄付された太鼓台「大清の太鼓台」を手本に、戦後龍田西部青年団の太鼓台が昭和25年(1950)に復活し、祭りは賑やかに開催されていたといわれている。その後、昭和62年(1987)頃龍田青年団に改称し、この頃は1台の太鼓台で祭りに参加していたといわれる。

その後、平成6年(1994)に峨瀬・北庄・高塚町の三自治会で龍田北部太鼓台が完成、平成8年(1996)に龍田青年団が太鼓台を新調、平成9年(1997)には龍田東部太鼓台も新調し、地域の力で復活した平成の3台の太鼓台が祭りを盛り上げている。なかでも龍田北部太鼓台は布団やぐらに女性が乗り込む男女平等太鼓台として氣勢を上げている。各地区の太鼓台は、宵宮の午後に龍田神社に集合する。夕刻から各太鼓台は各地区内を練り歩く。

本宮の日は、各太鼓台は午前中に各地区を練り歩き、龍田神社に集合する。神事後、奈良街道の御旅所を巡る渡御行列が行われ、夕刻龍田神社に戻り祭礼が終わり、太鼓台は各地区に戻っていく。

神輿や太鼓台の巡行する奈良街道は、国道25号が猫坂からはずれていたことにより、商業・門前町、宿場町として街道の町並みを残し、社寺とともに、太田酒造をはじめとした近世・近代の建築物が数多く残っている。



奈良街道を巡行する太鼓台



奈良街道沿いの町並み



龍田神社の秋祭りの太鼓台



龍田青年団太鼓台



龍田東部太鼓台



龍田北部太鼓台

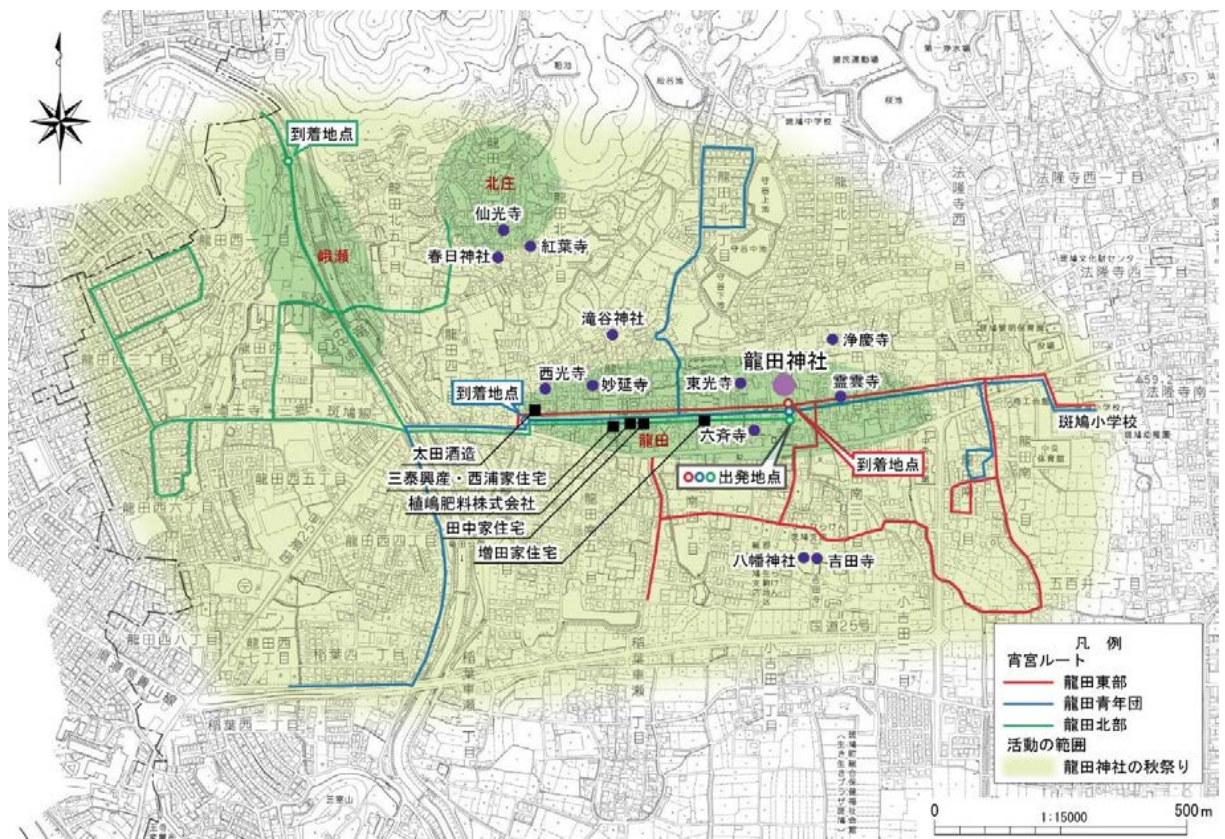


龍田神社の秋祭り

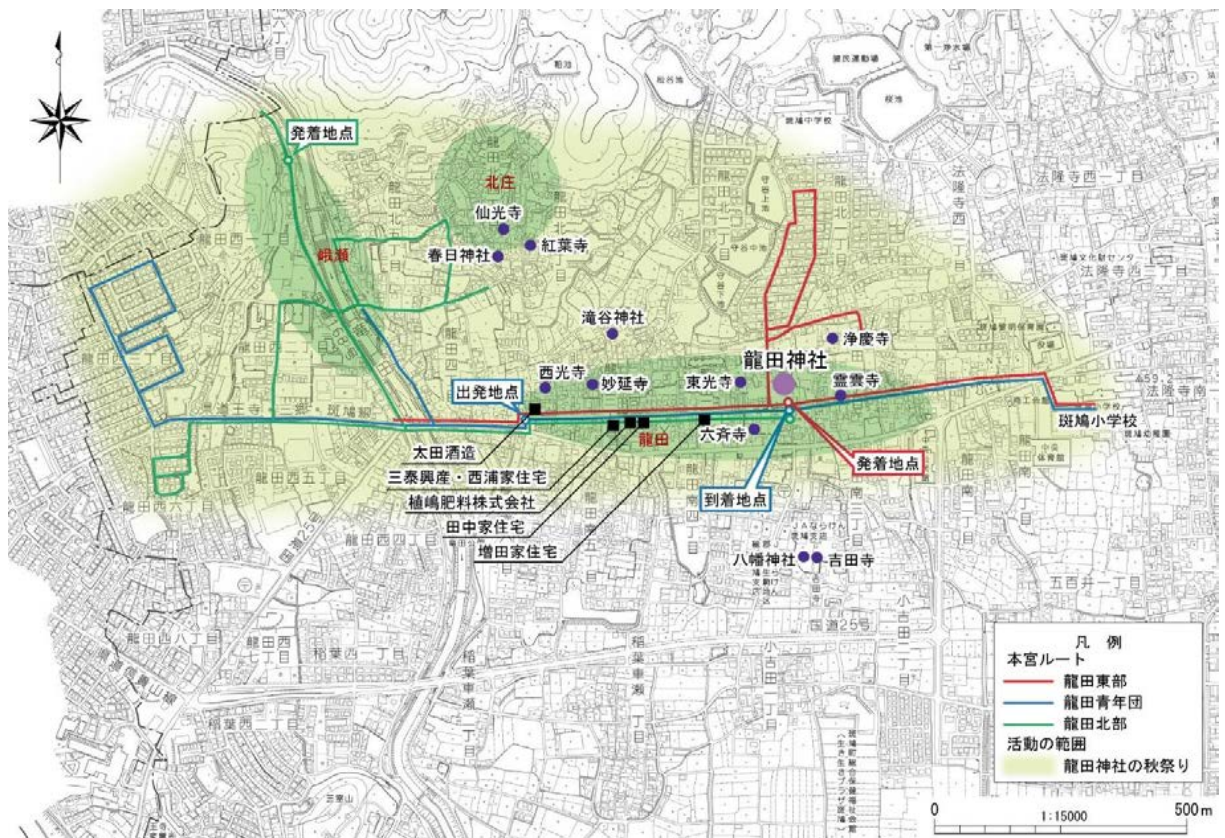


龍田神社の秋祭りの提灯台

龍田神社の秋祭りの巡行ルート



宵宮ルート



本宮ルート

図2-15 歴史的風致を形成する人々の活動の範囲

コラム：奈良街道沿いの町並みを形成する建造物

太田酒造は奈良街道に沿って形成された龍田集落の西側、国道25号から猫坂と呼ぶ急な坂を登ったところにある。太田酒造は明治3年(1870)開業の酒屋である。建物は古く主屋は江戸時代後期の文政12年(1829)に建てられ、主屋や蔵など6棟の建物が登録有形文化財に登録されている。建物は西に向かって下がる場所に位置していることから、土地を水平にするため積まれた石垣の上に建てられ、外壁は街道に面した南壁は黒漆喰塗り、東西壁は白漆喰塗りと違いがある。天保9年(1838)に諸国巡検視が龍田村を通った際、当家が宿所にあてられるなど当時から豪商であったと伝えられる。

三泰興産・西浦家住宅は、明治30年(1897)頃の築造とみられ、もと製綿業の町家を昭和4年(1929)に現所有者に買い取られたものと伝えられ、正面の腰板が美しい。

植嶋肥料株式会社は明治13年(1880)頃の築造と伝えられ、東に土間、下見世を持つ典型的な町家である。

東側の田中家住宅は、明治34年(1901)の築造と伝えられ、かつての町並みが偲ばれる。

増田家住宅は、明治期の築造といわれ、明治30年代に大改修している。かつては「大清」という絞油屋を営む豪商であった町家である。



太田酒造



三泰興産・西浦家住宅



植嶋肥料株式会社



田中家住宅



増田家住宅

(3) まとめ（暮らしに息づく歴史と文化に関連する歴史的風致）

北庄地区の春日神社の渡御行列が法螺貝を鳴り響かせて龍田の奈良街道を龍田神社に向かい、本殿前において執り行われる厳かな神事後、祭礼が始まる。龍田神社の秋祭りでは、龍田の各地域の太鼓台は、色づき始める境内の紅葉のもと、龍田神社に集まり各地域を巡る。宵宮、本宮では太鼓の音が鳴り響き、集まる人々の歓声や提灯の明かりで奈良街道は祭り気分一色に染まる。太鼓台は、歴史的建造物が軒を連ねる古い町並みと一体となり、歴史的な町並みの中で息づく伝統的な地域の人々の活動は、そこに住み続ける人々の強い愛着と絆を深め、往時の宿場町としての龍田の賑わいをふと垣間見させる瞬間でもある。

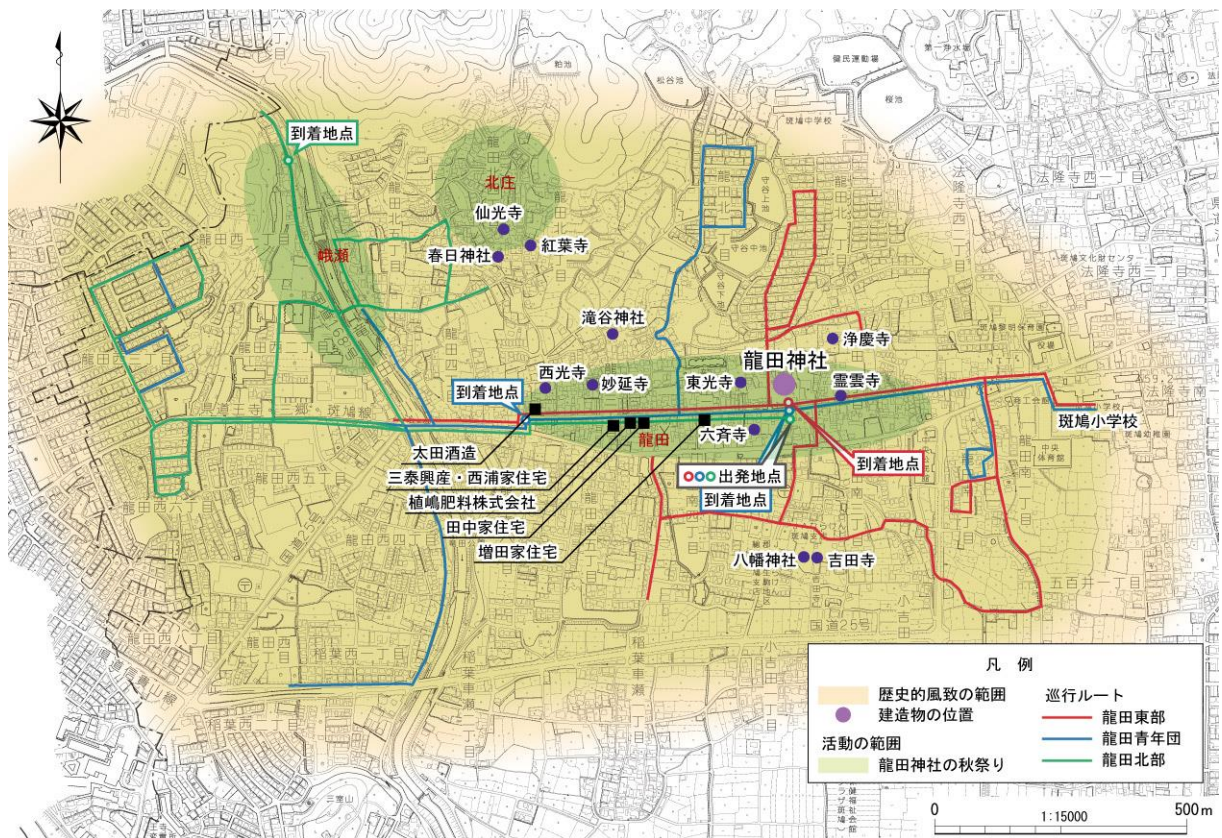


図 2-16 龍田神社の秋祭りにみる歴史的風致の範囲

コラム：神南の大トンド

神南の大トンドは正月の風物詩といえる伝統行事である。トンドは1月15日に書き初めや標縄や社寺の古いお札を持ち寄り焼く、五穀豊穡の感謝と祈りの伝統行事で、神南はじめ各集落でトンドをあげていた。神南では、昭和12年(1937)頃までは北神南（竜田川河川敷）と南神南（大和川・竜田川合流点の河川敷）で大トンド行事が行われていたが、昭和58年(1983)に統合されて、神南の大トンドが復活した。大トンド委員会が中心になり、11月3日頃に相当数の稲わらを集めて準備、12月中に吉野の間伐材を貰い受け、1月第2日曜日に自治会総掛かりで竹約700本を集め、15日の午後6時頃に点火する、約1時間のイベントである。近くでは服部の集落でも服部川堤で大トンドが行われている。



神南の大トンド

コラム：太神宮灯籠（おかげ灯籠）

斑鳩町内で10か所のおかげ灯籠が確認されている。伊勢神宮遷宮の翌年を神の加護を貰う「おかげ年」といい、おかげ参りが流行した。伊勢に通じる奈良街道には、他国からのおかげ参りをする人々に対して、立ち寄り目印として灯籠が立てられたとされている。特に天保元年(1830)の春は、大のおかげ参りが流行したといわれ、服部の素盞鳴神社の境内の南にたつ太神宮おかげ灯籠等がこの年に奉納されている。



太神宮灯籠



コラム：龍田神社と能楽の継承

金剛座とは、法隆寺に仕えた猿楽座である坂戸座を源流とする流派で、坂戸孫太郎氏勝を流祖とし、室町時代の初めには、春日興福寺に勤仕する大和猿楽四座の一つになった。そして現在の金剛流へと発展した。

法隆寺では、仏教法会の法楽として古くから伎楽や舞楽が行われたことは、法隆寺に保存されている飛鳥時代渡来の伎楽面や奈良・平安時代の多くの舞楽面によって知ることができる。平安時代に発生した猿楽と田楽は、法隆寺諸行事でも盛んに演じられた。

法隆寺所蔵の『往代年中行事』（永生8年(1511)12月）には六月会の田楽に関して、「法隆寺六月会には例年法楽として寺住の田楽法師が勤めていたが、理由を付けて勤められないと申立てたので、田楽の代わりに、元応2年（1320）6月に坂戸座猿楽の袈裟大夫に楽頭職を勤めてもらうことにした。その後、袈裟大夫の没後は甥の色石大夫が後を継ぎ勤めるようになり、延元元年(1336)6月には正式に楽頭職を与えられ六月会に演じられる芸能は猿楽のみとなった」ことが記されている。その後、平安時代からの猿楽芸能は、鎌倉時代に歌舞劇が生まれ能・狂言として姿を見せ始める。そして、結崎座の観阿弥やその子・世阿弥の活躍により次第に完成度を高め、結崎座は観世流、円満井座は金春座、外山座は宝生座として発展し、坂戸座は「金剛大夫」や「金剛座」と呼ばれるようになり、今日に至っている。坂戸座の名称は坂戸郷に由来するものであり、発祥の地は、現在の北庄にある春日神社とされているが、顕彰碑は龍田神社の境内に建立されている。また春日神社の元宮座の御宮知旧家には、坂戸座の衣装遺品が残されている。

金剛流の拠点には京都にあり、また法隆寺に奉納される舞楽・雅楽は奈良の南都楽所からの出仕による。これらの発祥の地であることにちなみ、毎年9月には上宮遺跡公園で観月祭が行われ、金剛流の能楽が上演され、多くの人を集めていた。また、令和3年(2021)には、1400年御遠忌事業として、法隆寺の中門で仲秋観能会を開催し、金剛流の能楽に触れる機会を創出している。また、斑鳩小学校では、3年生の総合学習の授業やクラブ活動で金剛流のシテ方に能を学び、その歴史を継承している。



仲秋観能会

序章

第1章

第2章

第3章

第4章

第5章

第6章

第7章

Ⅱ 吉田寺の「放生会」にみる歴史的風致

龍田の奈良街道の南に位置する小吉田集落の吉田寺^{きちでん じ}では、毎年9月1日に放生会が行われる。

古代より矢田丘陵の南端の竹藪の丘の南裾から清水が湧き出し、人々はこの丘を清水山^{しみずさん}と呼び、山裾から流れ出る清水が、美味しい米を稔らせる田を「キチデン（吉田）」と呼んだとされている。清水山の竹藪南腹に清水が湧き出している場所が3か所あったと伝える。現在、湧水は絶えているが、昔はコンコンと湧き出て、月夜にその流れる清水で眼を洗うと眼病が治るとも伝えられていた。また、『斑鳩町史（史料編）』（昭和54年(1979)成立）には、伝説として「清水の霊泉があり万病に効くが特に腰より下やすその世話がかからず、無病息災で長寿を全うして往生できるという。これを小吉田の温泉という。」と記述されている。



吉田寺本堂

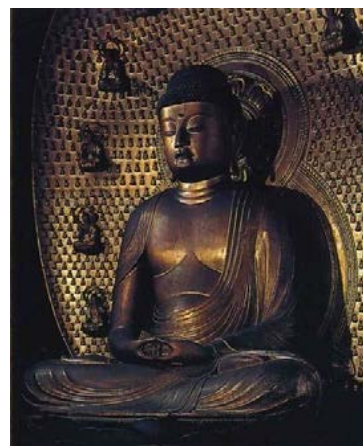
（1）歴史的風致を形成する建造物

吉田寺

『恵心院源信僧都行実』（怨哲著、享保3年(1718)成立）によれば、吉田寺は天智天皇(661～671)の勅建で妹の間人皇女（孝徳天皇皇后）の陵寺であったところに、永延2年(988)に恵心僧都がこの地に来遊し、生身弥陀の出現を感じ一寺を創建したという。『吉田寺因縁』（成立年代不明）によれば元禄3年(1690)に浄土宗に改まり、安永3年(1774)に中宮寺門跡慈眼院宮が梵鐘を寄進、翌年住持智霊律師のときに鐘楼堂を建立し、文久3年(1863)住持旭隆が勧進して本堂を再建したと伝えられる。

木造阿弥陀如来坐像（重要文化財）は、像高225.8cm、丈六式の全金色で定印を結び、衣文の刀刻は藤原末の形式で、恵心僧都の造頭と伝える。別に恵心僧都像（像高63.5cm）を祀り、像の裳に元禄3年(1690)の修理銘がある。堂内には鎌倉時代の阿弥陀立像、足利時代の阿弥陀坐像・薬師坐像や桃山時代の阿弥陀坐像・地藏坐像などが安置されている。

多宝塔(重要文化財)は、3間・2層の屋根本瓦葺の宝塔で、寛正4年(1463)の建立とされる。一辺の大きさ10尺強の小さい塔であるが、初層も丸柱を用いている。全体に非常に古風な手法を示すが、初層中央間にかえるまた曇股をおき（股内に梵字を入れる）その上に板曇股を重ねる新しい方式がみられる。内部には来迎柱を立てその前に仏壇を置き、その部を2重に折り上げた小組格天井



木造阿弥陀如来坐像



吉田寺多宝塔

を張っている。内には、恵心僧都の父、^{うらべ}卜部正親公の菩提を追善する大日如来像が安置されている。本堂の西にある墳丘に石標があり「龍田清水墓」とあり、間人皇后の陵と伝えられる。

吉田寺境内の南西には、八幡神社がある。天平勝宝元年(749)に豊前国宇佐八幡宮に使いをだし勧請(神仏の分霊を祀る)したと伝える。この地に清水が湧くことにちなんで清水八幡宮とも称し、吉田寺の鎮守社であり小吉田集落の産土神でもある。

吉田寺は、「ぽっくり往生の寺」ともいわれる。これには以下のような伝承がある。恵心僧都源信が母親の臨終に際し、お念仏「南無阿弥陀佛」の声の中、浄衣を着せた母親の大変安らかな極楽往生を見送られた。そのときの遺言に「人々が心身の苦しみなく、念仏往生できるように、立派な念持仏を祀ってくれるように」との願いがあったとされ、その後、恵心僧都が比叡山へ修行に登る途中、当麻道の清水山を通りかかると光を感じる霊木(栗の樹)が目にとまり、母親の追善供養と末世衆生救済のために阿弥陀如来像を造られた。これが吉田寺の本尊阿弥陀如来像とされており、この本尊に祈禱を受けた肌着を着用すると「延年天寿を授かり、腰下の世話をかけずに安楽往生できる」という伝承が生まれ、シモの世話にならないようにと肌着を持って御祈禱を受けに来る人が多い。



図2-17 歴史的風致を形成する建造物の位置

(2) 歴史的風致を形成する活動

小吉田集落の放生会

毎年9月1日に厳修される吉田寺の最大行事が放生会であり、「鳩にがし法要」「魚にがし法要」の名でも親しまれている。放生会は、『日本書紀』には、天武5年(676)に、「この日(8月17日)諸国に詔して、放生令を敷かれた」とあり、続く持統5年(691)にも、「畿内および諸国に長生地(殺生禁断の地)として各千歩を設けた」とあり、7世紀後半には国家行事として放生会が行われたことがわかる。

放生会とは、仏教の不殺生戒(むやみに生命を奪ってはならないという戒め)に基づき、生命の尊さを振り返り、我々が生かされることへの感謝と犠牲への供養の心をあらわす法会である。初めに鳩と魚を本堂に供える。午後より本堂に20名程の僧が入堂してお勤めをする。その後、お念仏をお称えしながら鳩や魚が解き放たれる。多宝塔の前では、白ハト100羽が子供たちによって大空へと放たれ、金魚やドジョウなど身近な魚500匹も門前の放生池へと放たれる。この日も朝から肌着を持参して祈禱を受ける数多くの信者のお参りがある。

吉田寺では関東大震災の頃にはすでに行われていたと伝えられ、『斑鳩町史』(昭和38年刊)にも、「清水山吉田寺では毎年九月一日に放生会と言ってハトを放つ行事がある。ここへ参拝すると死ぬときに安らかに死ぬるので河内や近郷から老人が詣でる。これを俗に「ぼっくり往生」という。」とある。また、境内には俳人大谷不凍(~1980)の「阿弥陀の法に叶うや放生会」という句碑が建っている。

小吉田集落より北側に向かう吉田寺では、不殺生戒の仏教法要である放生会の日、本尊の阿弥陀如来様の慈悲深い眼差しを受けて、本堂では鳩と魚が供えられた中法要が執り行われ、これらの生き物は境内に運び出される。

初秋を過ぎて少しずつ秋を感じさせるこの日、吉田寺本堂と多宝塔の前の広場では、僧侶の読経が行われる中、白い鳩を入れた鳥箱が子供たちの手によって次々と開けられて鳩が放たれる。人々の歓声とともに白い鳩は羽ばたきの音を響かせて、本堂の大屋根や多宝塔の軒先をかすめ大空へと飛び立つ鳩の姿や、境内への出入口である山門横の放生池に放たれて勢いよく泳ぐ魚の姿に、人々は生命の躍動を感じ、子供たちは命の尊さを学ぶ。



放生会

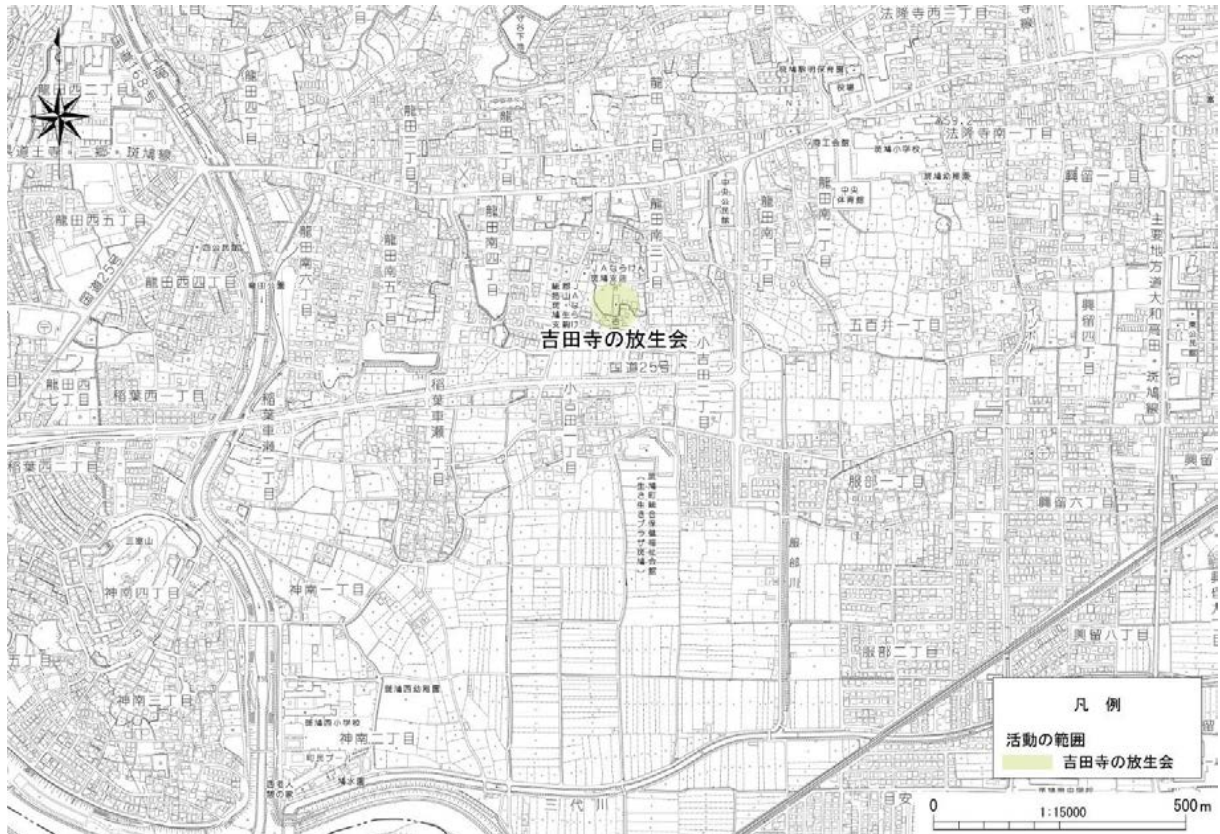


図2-18 歴史的風致を形成する人々の活動の範囲

(3) まとめ

放生会は仏教思想に基づき古代から続く国家行事であり、吉田寺における最大行事である。また、本寺には安楽往生の伝承があり、阿弥陀如来の祈禱を受け、近郷からも人々が参拝に訪れる。

このように、地域の人々が連綿と続く伝統と向き合い、生命の尊さを学び信仰心を深める場として、吉田寺の放生会は斑鳩町の歴史的風致を形成している。

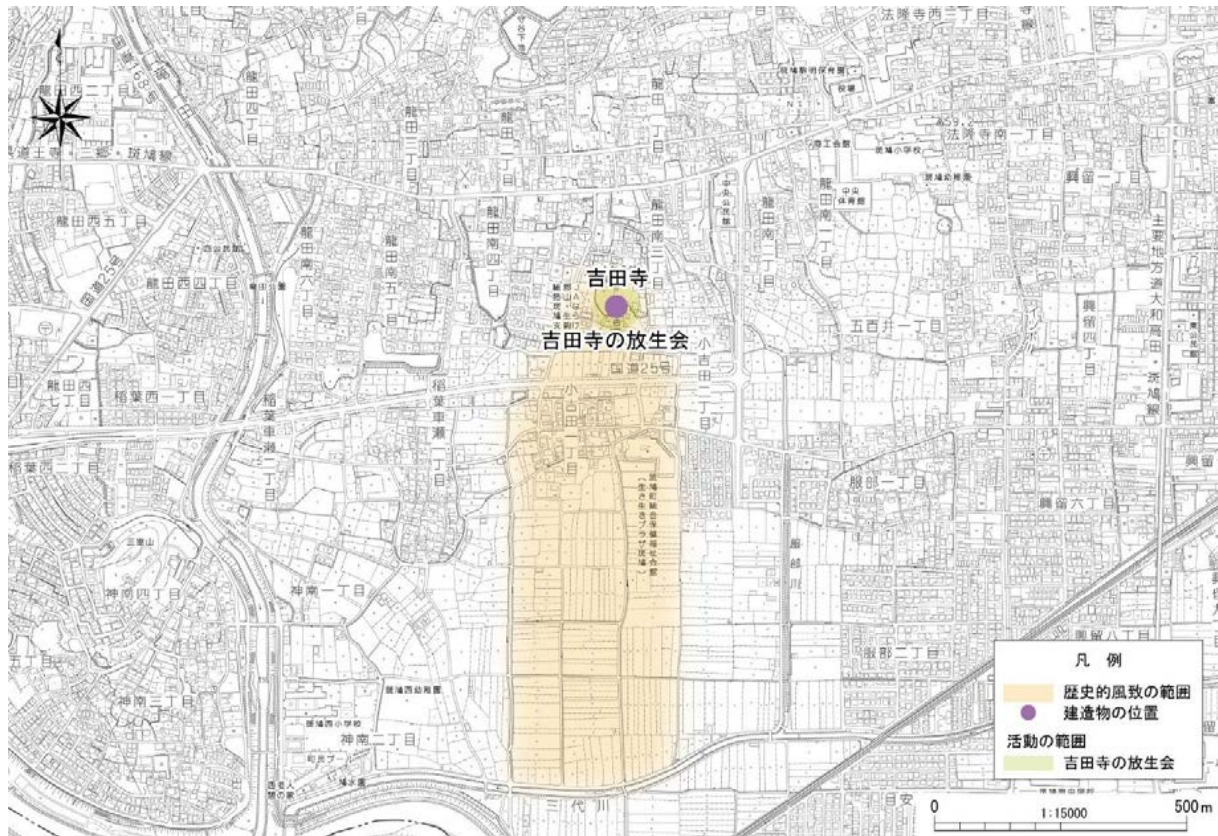


図2-19 吉田寺の「放生会」にみる歴史的風致の範囲

コラム：神南の瓦

小吉田集落の西方、三室山の東南、竜田川が大和川に合流する地点の北西に位置する神南では近年まで瓦づくりが続けられてきた。聖徳太子の時代、朝鮮半島から瓦博士が寺工とともに渡来して技法を伝え、斑鳩に瓦窯ができ、法隆寺の瓦が焼かれたと伝えられる。江戸時代までは南神南の西浦・南浦と油屋垣内と呼ばれる所から良質な粘土が出て、瓦屋が数軒あり村を発展させたとある。南神南の粘土がなくなっても、明治・大正・昭和初期までは大和川対岸の大輪田地区から粘土を運んだとあるが、戦後は減少していった。良質な土が得られないこと、また焼成による公害などの問題があり、現在、瓦製造は行っていないが、販売と屋根施工を業とする企業は残っている。創業元禄7年(1694)の孫七瓦工業もその一つであり、明治末期の築造とされる立派な瓦屋根の建物を残している。



孫七瓦工業



孫七瓦工業の屋根

コラム：五百井の水

小吉田集落の東側、矢田丘陵の山裾、奈良街道の南に五百井の集落がある。この地も、清水に恵まれ、井戸にまつわる伝説を生んでいる。五百井は、弘法大師が500番目に掘られた井戸に由来するといわれる。この井戸は、弘法井戸とも五百井戸ともいわれ、並松の西の端、奈良街道と国道25号の交叉する場所にある。

その傍らに弘法大師を祀った小堂があり、よのみ（榎）の老木がおおいにかっている。この井戸には、平安時代の歌人在原業平が現天理市の櫟本の住まいから高安山の河内姫のもとに通う道すがら、水面を水鏡にして自分の姿を映したという伝説（業平姿見の井戸）も伝わる。

その水は人々の暮らしを育み、醤油造りの伝統産業が今でも息づいている。ここには、創業明治33年(1900)のニシキ醤油と創業家の大方家住宅がある。大方家住宅の主屋は、江戸時代初期を下らない古い建築物といわれている。大方家は、当地に室町時代の末頃に移り住み筒井順慶に仕えたとされるが、慶長13年(1608)頃より農業を営み庄屋を勤めた旧家である。明治33年(1900)庄屋廃止に伴い、ニシキ醤油を創業し現在に至っている。



業平姿見の井戸



ニシキ醤油

おわりに（暮らしに息づく歴史と文化に関連する歴史的風致）

法隆寺の門前町である旧法隆寺村の5集落では、鎮守社である斑鳩神社から氏神が法隆寺の御旅所に^{とぎよ}渡御し、これを地域の人々が太鼓台・^{たいがく}提灯台を掲げて迎える伝統行事である斑鳩神社の秋祭りがあり、門前町の町並みの中で独特の歴史的風致を形成している。

また、西里集落では、大工集団の伝統を残す建造物と町並みが残るとともに、愛宕講や春日講などの民間信仰を背景に、地域の伝統行事が受け継がれている。重厚な大和屋根の主屋を背景に、長屋門から連なる土塀など歴史的建造物で構成される歴史的な町並みが拡がる中、そうした建物の片隅や狭い小径の傍らに、お地蔵様や小さな祠がひっそりと祀られている。ここには、いつも色とりどりの新しい草花が供えられており、人通りの少ない静かな町並みに彩りと安らぎを与えるとともに、その静かに手を合わせる人々の姿に、この地に暮らす人々の温もりや斑鳩の悠久の歴史と人々の信仰の深さを感じることができる。また、こうした姿に、この地の暮らしにとけ込んで綿々と受け継がれてきた人々のコミュニティとして、そこに住み続ける人々の信仰心と絆を深める場が、歴史的な町並みの中で今も息づいていることを知ることができる。

龍田神社を中心とした奈良街道沿道の龍田集落は、中世以降、門前町とともに近郷の中心的市場として栄え、近世には城下町として拡大、さらには奈良街道を軸とする伊勢参り、太子信仰の道としても全国からの旅人の往来があり、市場、門前町、宿場町として街道の町並みを形成してきた。今も、歴史的な町並みが残る奈良街道沿いでは、龍田神社の秋祭りをはじめとする祭礼などが継承され旧法隆寺村とは違った歴史的風致が形成されている。

さらに、矢田丘陵の山裾から大和川、富雄川、竜田川の河川敷の平坦地に点在する集落には暮らしに根づき受け継がれてきた民間信仰に基づく伝統行事によって形成される歴史的風致がある。

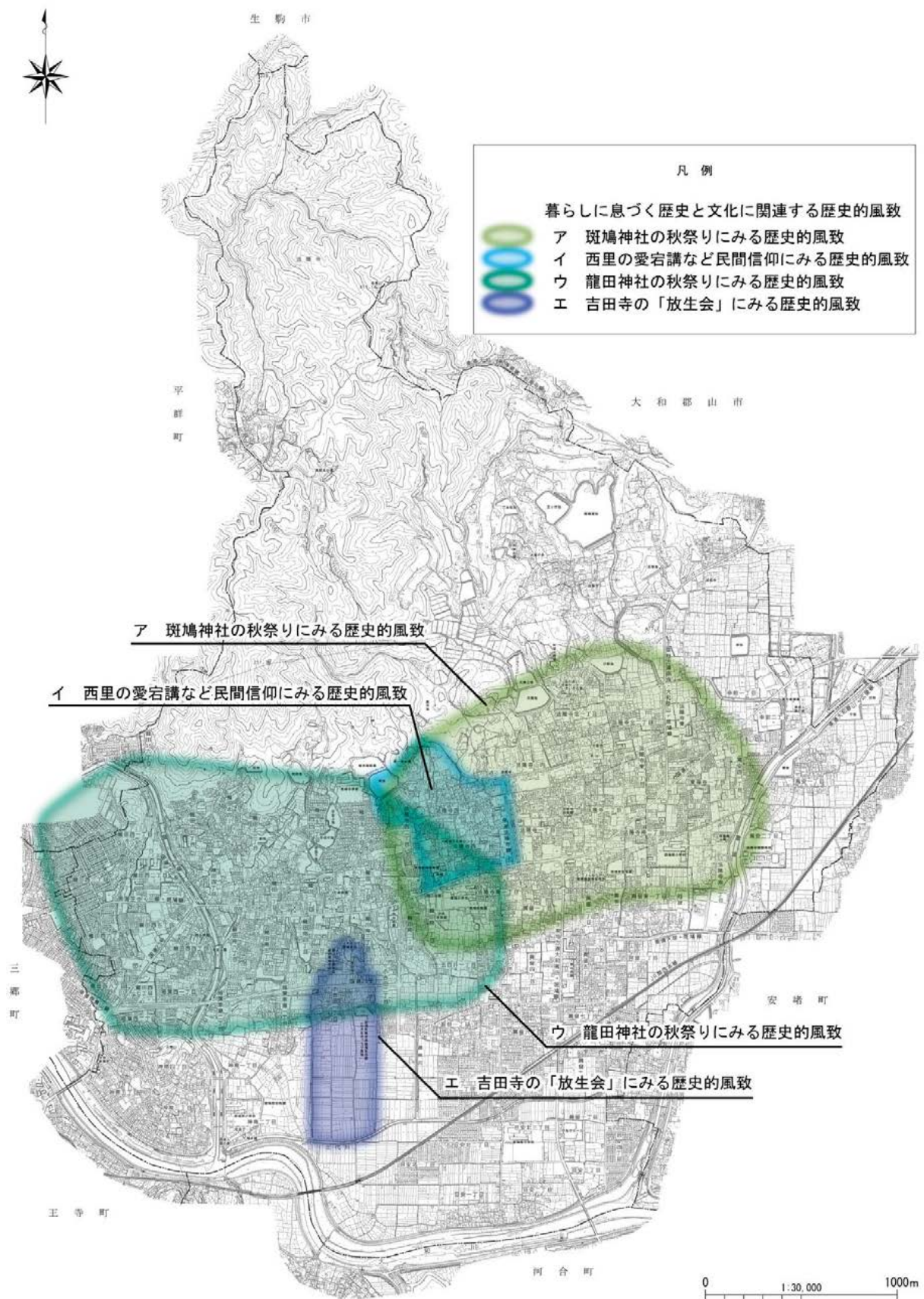


図2-20 暮らしに息づく歴史と文化に関連する歴史的風致の分布

序章

第1章

第2章

第3章

第4章

第5章

第6章

第7章